三咲物語

斉藤劉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三咲物語

【Ｎコード】
Ｎ８０３７Ｑ

【作者名】
斉藤劉

【あらすじ】
中学生になりたての梓はなぜ自分が人間なのか不思議に思う少し変わった少女である。
中学校生活を楽しんでいた梓は放課後にだれもいない教室でいつものようになぜ人間なのか誰かに問う。
その時、だれのものなのか分からない声が聞こえる。
謎の声が聞こえたその日・・・・

■しばらく更新しない予定

謎の声が聞こえたその日・・・（前書き）

完全オリジナル作品です。

謎の声が聞こえたその日・・・

なぜ目が見える？

なぜ考えることができる？

なぜ私は人間なの？

梓はそんな事を考える少女だ。

その時はいつもボーっとしていて答えが見つからないとわかると我に帰る。

そして今日も考えていた。

我に返ったのは授業がおわってからのことだった。

「ねえ、今日何したの？」

梓が聞いたのは仲の良い男子友達の拓斗だ。

「また寝てたのか」

「お、またラブラブなのか？お前ら」

いつもそうやってしゃべりかけてくるのは優だ。

「お前、うるさい」

拓斗が優の腹を殴る。意外と本気で殴ったようで優はその場にしゃがみこんだ。

梓はそれをただ見つめることしかできなかった。

「また漫才やってんの？」

そうやってくるのは渚だ。渚は梓の親友でもある。横には物静かな美玖もいる。

「やってる。この二人いつになってもこれだし・・・いいよね、こういうのって」

梓は勢いよく立ちあがって何かを受けとめたいかのように両手を大きく広げた。ま、こんな奴だ。

「ねえ、梓っていつもボーっとしてない？何考えてんの？」

「え？なんで目って見えるのかなぁって」

「・・・・。あんたおかしいわよ」

「そう？」

梓は天然だったりする。それに梓本人は気付いてないのだが・・・。

「はあ・・・この子、この先、生きていけるのか知らね」

渚は梓に聞こえないように言った。

――――――放課後――――――

梓は一人教室でボーっとしていた。
一緒に帰る拓斗のクラブが終わるのを待っているのだ。

「なんで私って人間なんだろ・・・・」

そして答えが戻ってこないと分かりながらもまた自分に問いかける。

知りたいか?

気のせいだろうか。確かに声が聞こえたような気がする。
梓は空耳かと思ってあたりを見回したあと黒板に落書きをし始めた。

「丸描いてちょん。丸描いてちょん。はい完成!」

特に何も完成していなかったりするのだが、梓からしたら完成なのだ。

さっきの質問はどうでもいいのか?俺なら答えられるぞ。

また声が聞こえた。

「あの～、さっきから誰ですか？」

梓は窓の外から聞こえたように思えたので窓をのぞいた。

どんっ

梓はそのまま逆さまになって窓から落ちた。

「きゃっ！痛～い！」

梓は窓から落ちた。でも、一階だったので幸い怪我はなく、何事も起きなかった。不幸中の幸いというのはこういうことだろう。

「誰よ、押したのは！」

梓は思いっきり打った腰を抑えながら後ろを見た。しかし誰もいなかった。

「・・・わたしの不注意か・・・」

そこで納得してしまうのが梓である。普通は「さっきの声が！」ってことになるのだが梓はならない。すべて自分のせいにして自分を追い込んでしまうところがある。

「何してんだ？」

そこに拓斗がやってきて窓から梓を見下ろした。

「えっと・・・落ちた。てへっ」

「・・・・てへっ。じゃねえよ！馬鹿だろ」

拓斗は呆れた。まさか窓から落ちるまで馬鹿だとは思わなかった。

「そういや～お前明日誕生日だよな」

「そういや～そうだね。忘れてた」

梓は窓から教室に入って中学生になってまだ一か月ぐらいしか来ていない制服の汚れをはらった。

「帰るぞ」

拓斗はすでにカバンを持って教室を出ようとしていた。

「ちょっと！待ってよ」

気をつけて帰れよ。

「？」

また声が聞こえた。しかし梓は気にせずそのまま帰った。

「じゃあね、また明日」

「おう」

拓斗は振り返ることもせず片手を上げただけで家の中に入って行った。

梓の家はまだ遠い。あと広い道を横切ったら家だ。

そして梓は横断歩道に辿り着いた。

その時、猫が突然歩道から出てきた。しかし、この道は広い。渡る途中で車の前に出た。猫は気付いていないようでゆっくり歩いている。

「危ない！」

梓は見ていられず、歩道から飛び出して猫を掴むと走って渡った。こういうとき、陸上部でよかったと思う。梓はマイペースだったりするが走りは速い方だったので何とかギリギリで道は渡れた。梓は歩道のちょっと出っ張ったとこに躓いた。

「きゃっ！」

「危ない！」

こけた梓に車が突っ込んできた。

そのあと、梓が車にひかれたのは言うまでもない。
梓の助けた猫は怪我ひとつなかった。が、しかし梓は重傷を負い病院に運び込まれることになった。
病院に運び込まれた梓はすぐに手術室に運び込まれてすぐに緊急手術がおこなわれた。

謎の声が聞こえたその日・・・（後書き）

いきなりピンチな主人公・・・・。
この後梓にいったい何が！？

きなこは命（前書き）

車にはねられた梓が気が付いた場所は空だった。
そんな変な場所から梓の新しい生活が始まる。

気をつけろと言ったのに

梓は起きる時そんな声を車にひかれる直前聞いたような気がしたことを思い出した。

「私は一体・・・」

目の前には青空が広がり下から風がすごい勢いでふいていて心地よい。

「私、どこにいるの？」

梓はふと気になりまわりを見回した。
そして梓がみたものはというと

「ここ、空！？っていうか地面に向かって落ちてるよ～！」

梓は空の上で叫びまくった。
それからしばらくして梓は静かになっていた。
五分くらい落ち続けている。それぐらい高いところだったのだろう。やっと地面が見え始めて安心していたぐらいだ。

「やっと地面かぁ。これでやっとあの世に行けるよ」

梓は笑顔でさらっと言った。さすがというかなんというか・・・。
梓は落ちるのにもだいぶ慣れたので地面を観察していた。

なんとなく、ここは東京とは違う感じがする。とにかく街の風景が明らかに古い。屋根は瓦で道路は地面丸出しだし、車一つ走ってない。

「ここ、どこなんだろう」

その前になぜ空にいたのかを気にした方がいいと思うのだが、あえてそこはほっておこう。

地面にもだいぶち近づいてきて人が見えてきた。

丁度梓の下で男か女かは分からない人が何かしていて退きそうにもない。梓からしたらどいてほしい。人を巻き込みたくないからだ。

「すみませ～ん！どいてくださ～い！」

梓の下にいた人は気づいたようで上を向いてくれた。なのにぼーっと梓を見ているだけだった。

「退いて～！」

もう一度梓は叫んだ。

その声はちゃんと聞こえたようで下にいる人の表情が驚きに変わった。しかし、その表情はすぐに消えて、不敵な笑みに変わる。

その表情を見た梓は下の人が男だということが分かった。

男は退こうともせずその間に立ち尽くしたままだった。

その間にも梓は男に近づいている。梓はもう駄目だと思って目をつぶった。

ふわっ

梓は地面に落ちたはずなのに全く痛くなかった。梓は目を開ける

のが怖かったが思い切ってあけた。

「よっ」

梓の目に映ったのはさっきの男だった。どうやら男は梓を受け取ったらしい。

「お前、何で空から降ってきたんだ?」

「え、それはその・・・・」

「分からないのか」

男は梓をゆっくり地面に下ろした。

梓は地面に立てることが嬉しかった。何しろ7分間は落ちていたからだ。思い切って地面に立ったがふらついて男によりかかってしまった。

「あ、すみません」

「いや、別に良い。で、あんた誰?」

「えっと、梓です」

梓は震える足で立ちながら言った。

男はじっと梓を見ると梓を軽々と持ち上げて腕に乗せた。

「足、震えてるだろ。話はあとで聞くからまず俺の屋敷にこい」

「あ、ハイ。いろいろありがとうございます。えっと・・・」

「名前言ってなかったっけ?俺は梏娥(こくが)って言うもんだ。よろしくな、梓」

梏娥は不敵な笑みを見せた。梓は今、梏娥の顔をちゃんと見たような気がする。赤髪に童顔。でも、なんかかっこいい。

梏娥は指笛を吹いた。すると何処からか黒い馬が走ってきた。

「こいつは蘭(らん)って言うんだ。こう見えて女なんだぞ」

梏娥が蘭の頭をなでてやると蘭は気持ちよさそうにした。

「・・・・」

梏娥は梓をじっと見た。

「な、何ですか?」

「変な服だな。よし、蘭の上で待ってろ。服買ってきてやるから。」

梏娥はそう言って梓を蘭の上に乗せるとどこかに走り去ってしまった。

梓は蘭の上でしばらく待っていたが、梏娥はなかなか帰って来なかった。

蘭の上で待っている間、すれちがう人から変な目で見られる。たぶん、梏娥もいっていた服装のことだろう。

ここの人はみんな着物を着てる。腰には刀をつけてる人もいたりして正直怖い。

「遅いな、梏娥さん・・・・」

梓は蘭の頭をなでながらつぶやいた。
梓が蘭の上に寝転がるとそこに変な三人組の男がやって来た。どいつの顔にも傷跡があって、やくざっぽい。
梓は蘭にしがみついた。

「な、何でしょうか・・・。」

梓は勇気を振り絞って笑顔で三人組に聞いた。
三人組の中でもリーダーっぽい奴が後ろから歩いてきて梓の顔をじっと見った。しばらく梓の顔を観察していると急ににやっと笑った。

「いい女だな。おい、お前らこいつを馬から降ろせ。」

梓は自分の身がものすごく危ないような気がした。いや、確実に危ない。

「えっと、私人を待っているんで・・・ほら、蘭行きましょ。」

梓は蘭の手綱を持とうと手を伸ばしたが先にリーダーっぽいやつに手綱を取られてしまった。
これは非常にまずい。
まだ足は震えてて走れそうにないし、蘭の手綱は男が持ってるし、梓は非常にやばい状態に陥ってしまった。
梓が逃げる方法を馬鹿な頭で一生懸命考えていたがその考えている間に男に担がれてしまった。

「ちょっと、何するんですか！逃げる方法を考えてたのに！」

明らかに馬鹿だ。なぜこいつらにそういうことを言うかが分からない。もちろん、男たちは馬鹿にした。

「馬鹿か？お前みたいな弱そうな女に逃げられてたまるかってんだよ」

あまりにも馬鹿そうに梓を見たのでさすがの梓もキレてしまった。キレた梓は誰にも止められない。

「おい、お前ら誰が馬鹿だと？誰が弱そうだと？ほざいてんじゃねえぞ！」

梓の蹴りが見事に男の顔面にあたった。蹴りをくらわされた男は鼻血を出してその場に倒れた。

梓は担がれていた腕が緩んだのを確認して綺麗に着地した。着地した瞬間三人組のまだ無事でいる男二人を睨んだ。

その眼光のすさまじさといったら百獣の王ライオンでも少しひるむだろう。

「ちょ、待て、女！キャラ変わってないか！？女の子がそんなのでいいのか！？」

あまりの変貌に男たちは驚くことしかできなかった。

「知るか」

梓はそう吐き捨てるとまずリーダーの腹にこぶしをくらわせた。見事にクリーンヒットし、リーダーは血を吐いて倒れた。どんだけの威力なのだろうか・・・。もう一人の男はジャンプした梓を目で追う事も出来ず、かかと落としをくらって気絶。

梓の周りに三人の男の身体が転がっているのは言うまでもないその寸劇のようなものはおわり、周りからは拍手が送られた。
我に返った梓はいつも通りの梓に戻っていた。

「え?私何かした?」

おどおどしていて覚えていないようだ。もしかしたら知らない方がいいのかもしれない。丁度そこに桔娥が帰ってきた。

「あ、桔娥さん。」

梓の顔には笑みがこぼれた。知らない土地での一人は心細かったのだろう。
桔娥は何かをくわえていて手には大きな袋を持っている。

「待たせ・・・・って何そいつら・・・」

梓の周りに転がっている男たちを見て桔娥は固まった。
梓はどうやら気付いてなかったようで顔から血の気が引いた。そのまま意識を失った。

「おい!」

桔娥は慌てて梓に駆け寄って支えた。

「ふぅ・・・って何があったんだよ。てか、こいつら最近出た女ばかりを狙ってる奴らじゃねえか…いったい何をしたんだこいつは・・・・」

桔娥はなんかすごく危ないような気がした。

梓は布団の上で目覚めた。

「ゆ・・・め？」

梓はしばらく寝転んでいた。しんとした部屋。病院なのかもしれない。

バァァァン！

違った。

引き戸が勢いよく開いて桔娥が入ってきた。

「起きたのか。よかったよかった」

梓はがっかりしたがそんな事をしても元のいた所にもどれないと思ってすぐに頭を切り替えた。

「おはようございます」

梓は桔娥に満面の笑顔を見せた。

桔娥の反応はただぼーっと梓の顔を見ただけだった。梓としては何か反応してほしいところだ。

「あの・・・・」

「ああ、ごめんごめん。女の笑顔はあんまり見ないから」

「そうなんですか。ところでここってもしかして江戸ですか？」

梓は今までの流れてきな感じでもしかしてという仮説を立てていた。

『自分は車にひかれてタイムスリップした』

という仮説だ。

しかし、その仮説はもろくも崩れてしまった。

「エド？何それ。ここはトーキョーだぞ」

「東京？ってえ！？私東京居るじゃん！帰れるじゃん！」

梓は布団から出て一歩を踏み出した瞬間、こけた。

「いった～い。ってえ！？なんで着物？」

梓は今頃自分が来ているのは着物だということに気付いた。

「ああ、それは俺が買ってきた服で着換えさせた」

平気そうにさらっと言う。梓の頭は真っ白になった。男に着替えさせられた・・・。と考えているのだろう。そう感じた桔娥は慌てて付け足した。

「俺じゃないからな！」

梓はすぐに機嫌を取り戻した。

「ところで、何で今頃の時代、着物で車とか走ってないんですか？」

「クルマ？ああ、お前もしかして平行世界からやってきたのか」

意味不明である。

「平行世界ってなんですか？」

「お前の世界と平行している世界。お前の世界ではたぶん全員知らないだろうがな。科学とか言うのも進歩してそんなのを信じる奴がいなくなったし。こっちの世界でも知ってるは俺たちぐらいかな？」

俺達というのに引っかかったが梓はあえて無視した。とにかく続きを早く聞きたいのだ。

「あの、つまり、私は元の世界に帰れない・・・ということですか」

「いや、それはない。ちゃんとお前の身体は向こうにある。今、お前が使ってる身体は、こっちにあるお前のからだ」

梓は意味が分からないようだったので桔娥は簡単に説明することにした。

「つまり、お前の体は二つの平行世界に一つずつあるってことだ。あっちの身体に魂がある時はこっちの身体は動かないしこっちの身体に魂がある時はあっちの身体は動いてない。でも、動かない身体がいっぱいあったら大変だろ。だから普通は空に浮いてるんだ」

桔娥は分かりやすく説明したつもりだがたぶん梓は分かってないと思う。

しばらく桔娥が悩んでいるとそこに一人の黒い髪を後ろにくくったきちんと着物を着こなした女の人が入って来た。

「世界に帰れるか帰れないかと聞いてるんだからそこをちゃんと答えてあげなさい。梓ちゃん、あなたがあっちとこっちを行き来できるようになったら好きなようにできるわよ。でも、今は無理。その行き来する力がないから。でも、ちゃんと手に入れることができるわよ」

女の人はにっこり笑ってくれた。その笑顔を見て梓は少し安心した。一方桔娥はなぜか不安そうな顔をしている。

「稀蝶（きちょう）の笑顔なんて気味が悪い」

桔娥はぽそっと呟いた。梓には聞こえたが稀蝶には聞こえていないようだった。

「あの・・・稀蝶さんって言うんですか?」

「ああ、そう言えば自己紹介まだね。私の名前は稀蝶。桔ちゃんの仲間よ。よろしくね」

なんて優しい人なんだろうか。しかもなんかかっこいい。

「っていうかいつか帰れるんですよね!」

梓は稀蝶にぐいっと近寄った。

「そ、そうよ。いつになるか分からないけど」

梓はため息をついた。いつか家に帰れるんだ

梓は着なれない着物の裾を持ち上げて歩いていた。そうじゃないと何回こけるか分からない。

あれから数日が立っていた。

あの時に聞こえた声の正体も分からないし、どうやったら変えるための力とやらを手に入れるのかもわからない状態。

梓は自分に与えられた部屋に戻るとそこの椅子に座った。

「お～い梓～」

遠くから桔娥が呼んでいる声がする。

「なんですか」

梓は桔娥の子供っぽさにあきれ始めていた。

桔娥は１６歳らしいのだが、なんか子供っぽい。ま、それがかわいくていいのだが。

桔娥は梓の部屋に勢いよく入ってきた。

「俺の飴知らない？」

「いつも舐めてるやつですか？」

桔娥はいつも棒付きの飴をなめている。よく太らないものだ。

「知りませんよそんなもの」

「そんなものとはなんだよ！あれは俺にとっての命同然！あれがなかったら・・・こう、力が入んなくて・・・ぐすっ」

なぜ泣くかが分からない。なんか、こっちが悪い気がしてくる。

「と、とにかく私は知りませんよ。いつものところにはないんですか？」

「ないから探してるんだ。仕方がない。今はきなこ餅で持ちこたえるか」

桔娥はそう言ってどこかに行こうとした。それを慌てて梓が止める。

「あの・・・飴じゃなくていいんですか？」

「俺はきなこ味が命なの！ただ粉を食べてたらむせるし、餅を持ち歩いてたら腐るからきなこ味の飴を俺が作ってんだ。でも、飴もないし、材料もさ、どこにも売ってないし・・・・」

桔娥がしゅんとした。悲しいらしい。

梓は桔娥のことがよく分からない。というか、本当に自分より年上かということが気になる。

梓がどうしたら良いのか悩んでいると稀蝶がやってきた。

「桔娥、飴の場所と材料のきなこがなんで売られてないか分かったわよ」

「まじ！」

桔娥の機嫌が直った。なんと分かりやすいやつなのだろうか。

「稀蝶、早く教えろ！」

「はいはい。梓ちゃんはここで休んでていいからね。桔ちゃんだけに行かせるから」

稀蝶は梓に笑いかけると桔娥を連れて部屋をから出ていった。

「はぁ・・・なんで俺一人で行かなくちゃいけないんだよ。」

桔娥は一人とぼとぼ歩いていた。

飴が無くて力入らないし、周りの人から見たらなんか絶対元気ないだろ、病気だろってな感じのオーラを出している。

実際、元気がないのだが、一歩一歩が頼りない。

「やっと着いた」

桔娥は姿勢を正して気合いを入れて店に入っていった。

「おいっ！きなこよこせ！」

いやいや、普通はこう言ってはいるもんじゃない。

いきなりの桔娥の登場に中にいたちょっと太った店主が唖然としていた。

しばらく沈黙が続いたが店主が大声で笑い出した。

「きなこっていったい何言ってんだい、お兄さん。」

「知ってんだぜ。お前、裏でいろいろやってんだろ。で、今度はきなこに見せかけてアヘン入れて売り払おうってやつだろ。それぐらい知ってんぜ。」

桔娥は草履をはいたまま桔娥は家に上がった。

「ちょっと、何言ってるんですかい。人聞きが悪いですね。そんな奴にはお仕置きをしなくてわ。おい、貴様らこい」

店主がそう言うと引き戸が開いてちょっとヤバそうな奴らが出てきた。

「なんですか?おやっさん」

「ちょっとこいつを殺(や)ってください。」

さらっと危ない事を言う店主だ。

その言葉を聞いたやばそうな人たちは桔娥に近づいてきてそのうち一人が桔娥の胸倉を掴んだ。

桔娥は全く動かない。

「お?あまりの迫力にやる気なくしちまったか?」

その言葉を聞いた桔娥の手がものすごく速い勢いで動いて、胸倉を掴んでいた男の顔面に拳をくらわせた。綺麗に吹っ飛ぶ。

「てめっ!何しやがんだ!」

「俺、ものすごく機嫌悪いんですけど。」

桔娥の目は殺気を放っていた。

「いい度胸だ。おもて出ろや！」

ということになってしまい、店の表で喧嘩をすることになってしまった。

いきなり男が殴りかかる。桔娥は逆に顔面を殴った。

でも喰らわせることが出来たのはこの一撃だけで、その後ぼこぼこにされている。

「きなこが・・・・足りない」

きなこがないから力が入らなくなってしまったのだ。

「なんかやってるし」

そこに梓がやって来た。桔娥のことが心配だったのだ。

「桔娥さん、大丈夫ですか?」

梓はボロボロになっている桔娥を見ながらのんきに歩いてきた。

普通駆け寄るだろうに。桔娥をぼろぼろにした奴らは梓の登場に唖然としていた。

「大丈夫なわけないだろ！」

梓は桔娥の腕をとって立ち上がらせた。

「大丈夫ですって。ほらこれ」

梓が出したのはきなこ味の飴だった。

「なんでお前が持ってるんだよ！」

「え、なんでって・・・家の隅の方に一つ落ちてたから」

桔娥は飴を奪い取ると早速口の中に入れた。

「で、どうしたら良いのこいつら。」

「血祭りに決まってるだろ。」

桔娥は笑顔なのだが黒い。桔娥の言い方に少し寒気がしたが梓は無視して桔娥の横に並んだ。

「分かったよ。私も頑張って血祭りにする。」

意味不明だよ。梓はもともと走ることしか能のないやつだったのだが、血祭りにできると思ってるのだろうか。

もちろん、その言葉にやばそうな人たちは梓たちの言葉にムカついて殴りかかってくるわけだったのだ。

が、しかしきなこ飴を口にくわえた桔娥は無敵といっていいほど強かったわけで、男たちは店主を見捨ててどこかに逃げてしまった。

桔娥はそれを見届けると店主のいる店の中に入っていった。

「おい、店主さんよ、今までの事、全部はいちまいなよ。」

人が変わった桔娥に店主は怯えていたが、嘘は貫き通したいらし

い。

「知らんといってる！」

「うそつけ！この俺が気付いてんだよ！」

桔娥はそう言うと袖の中から扇子を取り出してばっっと開いた。
扇子には赤い薔薇の絵が描いている。

「赤い薔薇・・・・きなこ・・・お前！いや！あなた様は藩主様！！」

「藩主！」

実は桔娥は藩主だったらしい。意外である。

「す、すみませんでした！今までのご無礼をお許しください！そうでございます。犯人は私でございます！」

藩主というだけでここまで態度が変わるとは意外だ。

「じゃあさっさときなこを出せ！」

「そこにあります」

店主は近くにあった棚を指差した。
桔娥は棚に駆け寄って引き出しを開けた。中にはいっぱいのきなこが入っていた。

「きなこ！！ふはははははは！」

これが本当に藩主なのだろうか・・・。

きなこ事件からしばらく経った日、梓は暇だったので桔娥をじっと見ていた。

桔娥は何も気にせず、ずっときなこ味の飴をなめていた。たまに口から出してじっと見つめる。汚いから出すなよ、と思う梓だったりする。

きなこは命（後書き）

きなこ大好きの桔娥君
トーキョーの藩主です☆

早く帰らないと（前書き）

少し進展します
それと新しい人も登場します

早く帰らないと

こっちの世界に来てから梓は自分の変化に気付いた。
見た目は別に変わって・・・・いや、胸が少々でかくなったような気がする。いやいや、そう言うことで無く、性格が変わったと思う。大人になったというか男になったというか・・・・とにかく変わった。桔娥のせいかもしれない。

「桔娥、おいしいのそれ・・・」

梓は思い付きで聞いてみた。
桔娥はバッと梓を見ると目を輝かせて語り始めてしまった。

「おいしいって美味しいに決まってる。甘くもあって甘くもないこの絶妙な甘さ!きなこってのはな奥が深いんだ。よし、俺が今からお前にきなこの良さを叩きき込んで――」

「叩き込まなくていいから」

話が続きそうだったので梓は桔娥の言葉を途中できった。
最近稀蝶はなんかの調べ物とかでどこかに行ってしまっている。こんなきなこ馬鹿と一緒だとつまらないし何か面白い事がないかとごろごろしている。でも、何も起きない。とにかくつまらないのが現状だ。

「なんか面白い事無いかな・・・」

梓がそう呟いた瞬間引き戸がものすごい勢いで開いた。と、同時に長身の男が一人入ってきた。

「桔娥！さびしかったか！」

大声で入ってきた長身男はどうやら桔娥の知り合いみたいだ。男は白髪で無駄に身長が高い。

「都真（とま）・・・・」

桔娥は寝ころんだまま仰向けになって都真を見上げた。都真は桔娥を見てにっこり笑う。そして、

「桔娥ぁ～！」

抱きついた。

この世界では梓の前に新しく登場する奴はみんなこんな奴なので最近、梓はこの世界の人たちは全員変なのかと思いだしている。

桔娥は苦しそうに抱かれている。

この風景を見ていると、親が息子を抱きかかえているようにも見える。

「あの・・・・」

自分の存在を確かめるように梓は声を出した。

都真は気付いてなかったようで桔娥を抱いたまま梓をじっと見た。

「こいつ誰」

それはこっちのセリフです！と梓は言いたくなったがあえてこらえた。

「わ、私はここでお世話になってる梓です」

第一印象を良くするために梓はにこっと笑った。

「いやいや、ここにすんでるってことは、お世話になってるのは桔梗だろ」

実はそうだったりするが梓はそう言うわけにもいかず黙った。

「っていうか都真！今までどこにいたんだよ！」

桔梗は都真の腕の中からはい出ると都真に怒鳴りつけた。

「いやいや、ちょっとな。」

ちょっとって一体何なのだろうか。でも、都真は話しそうになかった。

「ところで、あなたは一体誰なんですか？」

梓はもちろん都真のことを知らないわけなので、聞いた。

「ああ、俺。俺は都真。桔梗の僕（しもべ）さ。」

「下僕だろ。」

桔梗がポそっとつぶやく。都真は聞こえたようでこめかみをグリグリした。

「誰が下僕だって？」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさ～い！」

まるで兄弟のようだ。梓は二人の様子を微笑ましくみた。

梓は結構この世界にも慣れてきた。

まあ、前の世界と違うところといえば、変な輩（やから）とかがものすごく出ることぐらいだろう。でも言葉もちゃんと通じるので困ったことは特にない。

「他の街にも行ってみたいな。」

梓はごろごろと寝転がりながらつぶやいた。

毎日が暇でしょうがない。正直な話、事件とかもっと起きるとか思ってる。

横では都真がなんか書いていた。

その都真が急に話しかけてきた。

「他の街なんてない。」

「え？どういう意味ですか？」

面白そうな予感のした梓は勢いよく起き上がった。都真はまだ何か書いている。

「そのまんまだよ。平行世界があるのは東京だけだ。だからトーキョーしかない。」

「つまりその、平行世界って向こうより狭いってことですか？」

「ああ。平行世界ってもんは何かが起きないとできるもんじゃない。たとえ、ほかの平行世界ができてもつながることはまずない。」

都真が帰ってきたときは変な奴と思っていたが意外と普通なのかもしれない。
梓は少し都真を見直した。

「え、じゃあ、トーキョーってなんでできたんですか？」

「え？」

ものすごく集中していたようで聞いていなかったらしい。

「それは俺が説明しよう」

桔娥が部屋に入ってきた。ついさっきまでどこにいたのやら。いや、すぐに分かった。きなこ飴を作っていたのだろう。エプロンをつけているし甘いにおいが漂っている。

「一つ質問だなぜこの世界がこんなに科学が発達してないと思う？」

「さあ」

「それはな、この平行世界が出来たのは科学が発達していない時だからだ。昔、東京は大地震により、東京を中心としたところが海に沈んだ。その時、沢山の人が死んで大変なことになった。それじゃあまずい。ということで無理やり東京を元に戻したんだ。神様がな。だから、今の東京は東京であって東京でないわけだ。ま、東京とかかわりのあった所にいた奴らはその大地震の記憶を忘れさせられてるけどな」

桔娥はあっさり言った。

「じゃ、じゃあ無理やり東京を戻したからトーキョーが出来たの？」

桔娥は「そう言うこと」と、頷いた。

梓はただ唖然とすることしかできなかった。東京にそんな過去があったなんて。

「でもさ、何で桔娥はしってるの？」

「俺だけじゃない。都真もだし稀蝶もだ」

「私たちはこの世界を神様に頼まれたの。世界を渡り歩ける力を持ってたからね」

いつの間にか稀蝶が帰ってきていた。

「おお、稀蝶。久しぶり」

「久しぶり、都真」

都真は立ち上がると稀蝶と桔娥の横に並んだ。三人が並ぶとなんかかっこいい。

「そう言えば、稀蝶さんいつもと服が違うんですね。それ、男ものじゃないですか？」

「ちょっと調べるためにはこっちのほうが良かったのよ」

「で、三人は一体何なんですか？」

梓は三人の前に座って聞いた。いや、どっちかというと梓の前に

三人が立ったのだが。
桔娥が自慢げに言ってきた。

「俺達はこの世界を守るためにこの世界にやってきた。ただそれだけだ。」

もっとクールに言えばかっこいいのにと梓は思ったが口には出さなかった。桔娥がなんかかわいそうに思えたからだ。

「それぞれの平行世界に何人か私たちみたいな人がいるのよ。そのしるしが薔薇。私は黒薔薇」

稀蝶はそう言いながら胸元につけていた黒薔薇の髪留めを見せてくれた。

「俺は白薔薇」

都真はそう言って肩を出した。肩に白薔薇が描かれている。

「そして俺が赤薔薇」

桔娥は扇子を取り出してばっと開いた。
前にもみたことがあったがそういうことだったのか。
三人ともすぐにそれをしまった。

「これは町を歩いてる時に目立つから普段は見えないようにしてるんだ」

「でも、桔娥さんの服に薔薇の絵が描いてありますよね」

桔娥の左太もものあたりに赤薔薇の絵が描かれている。

「オレンジに赤だから目立たないし服の模様だからいいんだよ！」

桔娥はそう怒鳴ると腕を組んだ。怒っているらしい。

そんな桔娥の頭を都真がなでた。

「桔娥はやっぱり子供だな」

「うるさいっ！ところで稀蝶、分かったのか？」

都真と桔娥を微笑ましく見ていた稀蝶は「え？」というように桔娥を見た。

桔娥はため息をつくともう一度言った。

「調べてたの分かったのか？って聞いたんだ。」

稀蝶はああ、そのことというと話しだした。

「分かったわよ。梓ちゃんがどうやったら元の世界に戻れるか。正義を貫けばいいの」

「正義？」

「そう正義。つまり良いことしなさいってこと。分かりやすいでしょ」

「た、確かに分かりやすいですけど・・・・・ここって平和じゃないですか」

「あ・・・」

三人の声が綺麗に揃った。

正義を貫き通すって・・・どうやったら貫くことになるんだ？

「ま、がんばれよ」

桔娥はそう言ってきなこ飴を梓に渡してどこかに行った。

都真はあははははとか笑いながらどこかに行った。

稀蝶は「桔ちゃんまって～」といって追いかけていった。

つまり、三人とも逃げたのだ。

「・・・自分で考えろっていうことですかい」

梓は桔娥にもらったきなこ飴を口にくわえるとその場に寝転んで天井をじっと見た。

「そう言えば・・・拓斗とかどうしてるのかな。私の身体が向こうにもあるってことは意識不明状態なんだろうな。」

梓はしばらくぼーっとしていると都真が帰ってきた。

「梓、まだいたのか」

「悪いですか～」

梓は大の字に寝転んでいるのでたぶん都真は邪魔だなと思ってるだろう。

しかし、都真は何も言わず梓をまたぐとまた机の前に座って何かを書き始めた。

梓はしばらく都真を見ていたがあまりにも真剣にやっているのでやめた。
またボーっとし始めた梓はあることを考え出した。
その答えを探るように都真に聞いてみることにした。

「あのさ、目ってなんで見えるのかな？」

「は？」

都真は手を止めて梓をまじまじと見た。

「いいか、目に見えてることだけが世界じゃない。平行世界と一緒さ。向こうの世界にもお前の目がある。
ま、お前がここにいる限り目は開かないけど。でも向こうが見れることはできるぞ。みたいか？一回だけだけど。」

都真はいきなりとんでもない事を言ってくれる。向こうの世界が見れるというのだ。もちろん梓はみたいに決まってる。

「見たいっ！」

都真はうなずくと起き上がった梓に近づいてきた。

「準備はいいか？そうそう、梏娥たちには秘密だぞ。これができるのは俺だけだし、誰もこんなことをできるなんて知らないからな」

梓は頷くと目をつぶった。
都真は梓の頭の上に手を置いた。

「梓、目を開けてみろ」

都真の声が頭の中に響く。
梓は都真に言われたように目をあけた。すると、梓の真下に梓の身体があってベットの上に寝かされていた。回りを見渡してどこなのか確認してみると病院らしいことがわかった。
梓は自分の身体に近づいて自分の顔をじっと見た。まるで死んでるみたいに眠っている。

ガラガラ

誰かが入ってきた。

「都真！どうしよう誰か入ってきた！」

『安心しろ、お前の姿は誰にも見えない。でも、声は聞こえるからな』

「わ、分かった。」

『それと、俺は今から仕事に戻るから少し相手が出来ない。ちゃんと意識保っとけよ。どっちの世界にも戻れなくなるから』

都真はすごい事を言ってくれる。そう言うことは最初から言ってほしいものだ。
すでに都真は仕事に戻ったようで都真の手が離れた感じがした。

梓は入ってきたのが誰か確かめるために入口を見た。

「お父さん！」

梓のお父さんである翼は梓の声が聞こえたらしくあたりをきょろきょろ見回したが「空耳か」と呟いて梓のからだの横に座った。

「梓、あれから三年お前は起きる気配がないな」

どうやらこちらの世界は三年たったらしい。梓は驚くことしかできなかった。

翼は梓の顔に手を伸ばしたが途中でとめてしまった。

「梓、俺はどうしたら良い。お母さんも倒れてしまったんだ」

翼が肩を落とした。

翼のことを見ていれなくなってしまった梓はついしゃべってしまった。

「お父さん！私は大丈夫だから！」

翼は顔をあげて横たわる梓の顔を見た。

「梓なのか？」

「うん。私よ。お父さん聞いて！私は今いる世界のみんなと暮らしてるから。帰る方法も分かったの。もうすぐで帰れると思う。だから・・・だからもう少し待っててって」

「梓・・・わかった。待つ。だから早く帰ってこい」

梓の目には涙が浮かんでいた。涙をぬぐうために目をつぶった。涙をぬぐった後、目を開けると、都真の顔が真正面にあった。

「大丈夫か?泣いてたぞ」

「は、はい。大丈夫です」

梓の笑顔があまりにも明るかったので都真は目を見開いた。

「いい事があったみたいだな」

都真はまた机に向かった。

「ありがとうございます。私、早く帰らなくちゃ」

梓はそう言って立ち上がった。

「そうだ、梓、さっき目が見えるのはなぜかって質問してたな。ちょっと話がそれたけど。俺が言いたいのは目に見えるが真実とは限らないってことだ。だから何というか・・・・その・・・見えてることだけを信じるなってことだ。」

「意味不明ですよ。でも、本当にありがとうございました。」

梓はもう一度にっこり笑うと部屋を出ていった。

「意味不明って・・・聞いたからいったんだぞ。ま、元気になってよかったけどな」

「おい、お前それ、あんまするなって言われてただろう神様に」

「悪かったな。でも一人に一回ぐらいは良いだろ。ウィル。」

早く帰らないと（後書き）

最後のほうにちょっとだけ出てきた何か「ウィル」。
「ウィル」とはいったい誰なのでしょうか
今後ちゃんと登場します。

私は男じゃない！（前書き）

梓と都真の苦労話って感じですかね？

梓は屋敷でごろごろしているより、外を歩いている方が正義を貫き通せるのではないかと、街中を歩いていた。
東京だったらチンピラ的な奴がうようよいるのにトーキョーにはいない。いや、路地とか見えない所にいるんだろうな。
梓はそんな事を考えながらも街中を歩くのは、見るものが珍しいので、店の中をのぞいたらまた次の店をのぞく。という感じの繰り返しで、街中から抜け出せないのだ。

「私、まだ女の子っぽいとこあったんだな」

梓は次の店に入る前に呟いた。今からはいるところはアクセサリーを売っているところだ。
最近の梓はどうも着物が鬱陶しくなってきていて、下にシャツを着て上から桔娥のように着物を着崩して着ている。髪の毛もバッサリ切ってしまったので見かけは男の子だったりもする。性格も以前にもまして男っぽくなってきているのも事実だ。
そんな梓の中にもアクセサリーにひかれるという点では女の子なのだろう。

「いらっしゃいませ」

店員の人がお決まりの言葉を言う。
梓はそれを聞き流すと一つのネックレスに目が行った。
そのネックレスはいたってシンプルなのだが、またそう言うところもよかったりする。幸い、街に出るなら金を持っていった方がいいな。という桔娥の言葉により、梓はお金を持っていていた。
しかも、桔娥は金銭感覚には疎かったらしく、「少ないけどこれ

ぐらい持ってけ」と言って渡されたのは約一万円。
これが少ないというのだろうか。東京にいた時のこずかいの5倍の額だったりする梓は貰った時に開いた口がふさがらなかったぐらいだった。
梓が買おうか買わないか悩んでいると店員の人が来た。

「男のお客様にはこちらが人気ですよ」

「女です」

梓が店員を見ることもなく言うと店員はさっさとどこかに行ってしまった。謝るとかしてはどうなのだろうか。
そんな事が頭をよぎったが今はそれどころではない。今はこのネックレスが問題だ。
ネックレスの飾りは、少し大きくて縦に長い三角形がど真ん中にあって、その左右に細い長方形がある。
五分ぐらいネックレスと睨みあった結果、買うことにした。

「これ下さい」

そう言って梓はネックレスをレジの上に置いて店員を見ると、さっき梓のことを男と間違えた人じゃなかった。

「くすっ」

思わず梓は笑ってしまった。どれだけ気もが弱いんだよ店員A。

「どうかしましたか？」

「い、いえ」

「一五六〇円です。」

梓は笑いをこらえながらもお金を渡した。

店員はそんな梓を無視してお金をとると、ネックレスを袋に入れようとした。

「あ、いいです。今つけるんで」

エコだよエコ。今の時代からエコはしなくちゃね。

店員はあ、そう。とでも言いたそうな顔をしてからネックレスを梓に渡した。

梓は受け取るとさっさと店を出てネックレスを付けた。

「よし。そういや～、エコも正義なのかな？・・・んなわけないか」

梓はそんな事をつぶやくと本当の目的である正義を貫くということをできるかもしれない路地裏に入っていた。

入った瞬間、いきなりチンピラにぶつかった。そしてチンピラはお決まりの言葉を言う。

「おいてめぇ、服が汚れたじゃねえか。どう責任とってくれんだよ。あ？」

服が汚れたって・・・しりもちついて汚れたの私なんですけど。

と、梓は言いそうになったが、あくまで相手はちょっとヤバそうな相手であることを思い出した。

しばらくぼーっとチンピラ二人をみた後、梓はぼそっと呟いた。

「にんじんと玉ねぎ見たい」

二人はまさににんじんと玉ねぎだったのだ。

背の高くてひょろっとした方の顔はニンジンによく似ていて、背が低く太った方が玉ねぎに見えたのだ。

梓の一言でにんじんと玉ねぎは怒ったらしく、しりもちをついたまま座っていた梓の胸倉をつかむとぐっと持ち上げた。もちろん、体重の軽い梓は軽々と持ち上げられる。

これはやばい。正義がどうのこうのという問題じゃない。まずは自分の身を――

と、考えている間ににんじんが梓の腹にこぶしをくらわせた。

こういうことになれていない梓は意識を手放した。

「・・・・意外と弱いなこいつ。どうするよ」

「・・・・よく見たら可愛い男だな。姉さんが喜ぶかもしれない。連れて帰ろうぜ」

「そうだな。姉さん喜ぶぞ」

ものすごく危ない状況になったのも知らず梓は袋に詰められて連れて行かれるのだった。

にんじん野郎と玉ねぎ野郎は陰間茶屋に堂々と入っていった。

そしてどんどん奥に進んで行って、ある女の前に梓の入った袋を放り投げた。

「姉さん、いいのが手に入りやしたぜ」

「ん？」

姉さんと呼ばれた女はここのオーナーの蘭華（らんか）だ。３０代のおばさんのくせにものすごくきれいだ。まあ、中身は可愛い男好きのただのおばさんだったりする。

蘭華は袋の中をあさって未だに気を失っている梓を袋の中から出した。

「まあ、これは売り物になるわ。早速店に出しといてね。それから私は寝るからくんじゃないよ」

蘭華は梓をにんじんに渡すとその場に寝ころんだ。

「了解。」

――☆――☆――

梓は自分の状況が分からなくなっていた。

眼が覚めてみると一つの部屋いた。何が起こったのか全く分からない。

しばらくそこのでじっとしていると、にんじんがやってきた。

「起きたのか。いろいろ人が来るけど相手するだけでいいから」

いやいや、意味不明だ。ここ、どこだよ、おい。

「にしても、女みたいだな」

梓は女だ！と叫びたくなったがとりあえず今はこの人の話に合わ

すことにした。そっちの方が後で何かと楽になりそうだから。

「と、ところで、ここはどこなんでしょうか？」

梓はちょっと声を男の子風に変えた。

声を帰るのは大得意だ。友達に七色の声を持つ女と呼ばれたことだってある。

ちゃんとだませたようで、にんじんは全く気付かなかった。

「ここは陰間茶屋だ」

「？」

「知らないのか？男色を売ってる茶屋のことだよ」

「なんだって！」

梓はただぼーっとすることしかできなかった。

「そうそう、もうお前に客入ってっから頼んだぞ」

「え、ちょ、まっ・・・・・・行っちゃった」

梓はものすごく混乱してた。

キャバ嬢ならまだどうにか逃げ切ったりじらしたりして安全だったかもしれないが、ここは陰間茶屋とか言うところで、男のくせに男の相手をするところだったりする。

もちろん、梓は女のわけであって、もし女ということがばれたらどんな目にあうか分かったもんじゃない。

「今日の相手は誰かな？」

そう言って早速お客が入ってきた。

やばい。これはやばい。どうにかして逃げなくては。

梓はお客に顔を見せないように立ち上がると部屋を出ていこうとした。

しかし、お客はそれを許さない。

「ちょい待ち。ちゃんと相手してくれよ。」

梓はお客の顔面を殴って気絶させてから逃げようと振り返った。

「桔娥さん！？」

「あ、梓！何でこんなと――」

「あんた何やってんですか。っていうか桔娥さんにこんな趣味が・・・」

「違う！！俺はここにきて話を聞いてもらってんだよ！男には男にしか話せない話があるんだ！」

「でも、何で私なんかになったんでしょうか」

梓は桔娥の前に座ると桔娥に聞いた。

「俺はいっつも新人を選ぶんだ。ここはなちょっと悪行を働いてるところでもあって、無理やりここに連れてこられる奴がいるんだよ。で、藩主の俺はそう言うことに手を出してはいけないということになっていて、っていうか神様がそう決めたんだけど・・・・とに

かく、かわいそうな新人、つまり強引に連れてこられた奴らの話相手になってやろうと来てるわけだ」

梓はそう自慢げに話す桔娥を疑いの目で見た。

「ほ、ほんとだぞ。ここは女も入れないし、都真は逆に男で遊ぶから俺が来てんだ」

それなら納得である。

都真が桔娥を襲っていて返り討ちにあっているのは見ている。逆に稀蝶が近づいたらササッと避けるのも見る。つまり女が嫌いで男が好きということなのだろう。

「ちょっと待ってください。ここって悪いことしてるんですよね」

「うん」

「よし、じゃあ私がやっつけます」

梓はそう言うとともに勢いよく立ちあがった。

しかも腰の紐をぎゅっと締めてさっさと部屋を出ていこうとした。

「ちょい待ち。一応はお前、働いているってことでここにいるんだろ?部屋から抜け出したってばれたらまずいだろうし、やばいだろ」

「そうですね・・・じゃあ、桔娥が私の代わりになっといてください」

「え?」

桔娥は梓の顔を涙目で見てきた。マジでいやらしい。

「嘘ですって。大丈夫。逃げる時はちゃんと逃げれますから。走るのには自信ありますし」

梓はにこっと笑うと部屋を出て行ってしまった。

「ええ～・・・・俺どうしたらいいのさ。愚痴聞いてもらえる人いなくなんじゃんか」

悲しそうな桔娥を一人だけ部屋に置いていき、梓はどんどん奥に進んでいった。

そしてものすごく豪華そうな部屋に辿り着いた。

「ここかな？」

梓は不安になりながらもドアをあけた。

「すみませ～ん。」

梓は怖がりながらも中をのぞいた。さっきまでの勢いはどうしたのやら。

「ん？」

中には蘭華がいた。

梓を何かいい獲物を見つけたような目で見る。

「あんたは新人の子だね。ちょっとこっちにおいで」

蘭華はにっこり笑って手招きをする。
梓は少し警戒しながらも蘭華の前に進んでいった。

「そうよね。いきなり男相手は無理よね。まずは女からじゃないと」

蘭華はそう言って梓を押し倒した。非常にまずい状況だ。とりあえずは誤解を解いてみることにする。

「いやいやいやいやいや、私女だから。」

蘭華はその言葉にかたまった。
しばらく固まった蘭華は我に帰ると梓の上からどいて梓の腕を引っ張って起こしてくれた。

「女が何でこんなところに」

「にんじんと玉ねぎに襲われたんですよ!」

梓は怒鳴った。
しかし、蘭華はまったく動じなかった。それどころか半分ぐらい聞いていない。

「にんじんと玉ねぎ?」

そこに引っかかってるのかよ。女だったというところではないのか。
梓はもうなんかやる気をなくしかけていた。
その時蘭華が「ああ!」と大きな声を出した。

「にんじんと玉ねぎって馬楽と慎鹿のことね」

「名前なんて知らんわ!!」

この人は天然なのだろうか・・・。

「あの馬鹿コンビ、最近店の子たちを袋づめしてくるからなんでかな?って思ってたらさらってたの」

「ええ?分からんかったんですか?」

「だってさ、連れてきた男の子たち、私のところにきて次の日も来ますっていうだもの。自主的にくるのよ?わかるわけないじゃない」

桔娥のせいか・・・。桔娥のせいで男の子達がこういう所に自主的にくるようになるのか。いったい桔娥はかわいそうな男の子たちに何を言っているのだろう。

「そうだったんですか。じゃあ悪いことはやってないんですね」

「悪いこと?やってるわ」

梓は蘭華の言葉を疑った。

普通やってるって自分で言いますか?この人絶対おかしいよ。

「たとえば・・・なにをやって・・・」

「秘密に決まってるでしょ。まあ、そこまで悪いことじゃないけど。藩主が許してることだし」

梓は全身から力が抜けた。桔娥が許してるって・・・・・悪いこととというのだろうか。

「え？じゃあ、ここに男の人たちを勝手に連れて来てるのはその、馬楽と慎鹿って言う人だけなんですね。」

「そうよ。くそ、あいつら、後で痛めつけてやらないといけないわね」

「た、大変そうですね」

梓は「あはは」とか言って話をそらそうとした。話をそらして早くここを出たい。

でも、逆効果だった。

「大変も何も、忙しいったらありゃしない！あの藩主のせいよ！」

これも桔娥が原因なのか。あいつはいったい何をしているのだ。

梓があれこれ頭の中で考えていると、蘭華が梓の肩をガシッと掴んだ。

「私の話、聞いてくれる？」

涙目でそんなことを言われると断るにも断りきれない。

「は、はい」

梓はついつい受けてしまった。

それから夜までぐだぐだと酒を飲みながら蘭華の話を聞いた。

梓は未成年なのだがこの世界で関係あるか！となぜかやけくそに

なっていっぱい飲んだ。
そのせいでぐっすり眠ってしまった。
その梓を家に帰すのは馬楽と慎鹿だ。下っ端ってたいへんだよな、と思う瞬間である。
やっとのことで家についた。

「すいやせ～ん、お嬢を連れてきやした。」

ガンっ！カン

引き戸がどうやったらこういう音を出して開くのだろうか。
ちなみにガン！というのは勢いよくあいた音でカンという音はあまりの勢いで引き戸がもう一度しまってしまった音だ。

「・・・・・。」

反応はどうしたら良いのだろうか。

「ちっ、しまんなよ」

そう言って出てきたのは都真だった。ものすごくイライラしている。

「す、すみません・・・・」

「あはは、こっちこそ悪かったな。ちょっとイライラしてて」

誰がどう見ても少しではないだろう。

「あれ～？ここど～こですか～？」

梓が起きた。まだ酔ってたりする。
都真が梓の顔をじっと見てから梓を持ってる馬楽を見た。

「こいつ、どしたんだ?」

「姉さんと酒を・・・・」

都真は大きくため息をついた。

「悪かったな本当に。ありがとう、あとは大丈夫だ」

都真はそう言うと馬楽から梓を受け取るとさっさと中に入って行ってしまった。
「なんか・・・・・いい人だね」

「怖いけどね・・・はははは」

そう言って馬楽と慎鹿は帰っていった。
一方家の中では梓が暴れまくっていた。

「私はでしゅねぇ、ほんっとょ〜にぃ、桔娥しゃんのことをでしゅねぇ信じちゃんでしゅよぉ〜!なのにしゃぁ、蘭華しゃんから聞いた桔娥しゃんのはなひは〜も〜酷いったらあらひないんでしゅよ〜!どうせちゅめいひてくれるんでしゅか〜!」

なんとなく言ってることが分かるがかつぜつが悪い。

「いやいや、俺に言われても困るんだけど」

桔娥のいない状態で都真に言われてもただ話を聞くぐらいしかできない。

「・・・・・」

「梓？」

梓はぐっすり寝ていた。

「迷惑掛けて寝るとかどんだけ自己中なんだよ。って、酔ってるから仕方ないか」

都真は進路を変えて梓の部屋に向かった。

都真は寝ている梓を無視してぶつぶつ文句を言っていた。ちなみにそれは稀蝶のことであったりもする。

梓の部屋についた都真は梓を優しくベットに寝かして部屋を出ていった。

私は男じゃない！（後書き）

いったい桔娥さんはあの後どうしたんでしょうか。
本編では全く触れられないので想像してみてください。

神と創造物と協力者（前書き）

今回は神様やら神見習いやら創造物とか協力者とか沢山新しい言葉が出てきます。

ウィルとはいったい誰かも分かります。

神と創造物と協力者

「う～」

梓は布団の中で唸っていた。頭が痛いらしい。
ま、簡単に言えばただの二日酔いだ。

「梓～」

桔娥が大声で入ってきた。

「うるさい！黙れ馬鹿！」

ものすごい言い様である。
どっちらかというと梓の方がうるさいだろ、と桔娥は思ったが「ま、いいか」と流した。どうも桔娥はいろいろな面で適当だったりもする。

「梓、昨日神様が来たんだよ」

「は？」

梓は布団から顔を出した。ものすごく不機嫌なのが分かる。そのせいでキャラが変わってしまっているのだが、そこはあえてほっておこう。

「いや、だから神様が来たんだって」

「で、それでどうしたんですか。それ言いに来ただけだっらどか言

ってくれませんか？」

「いやいや、この先が重要だから。で、神様が『梓ちゃんはちゃんと正義になることをしているね。たとえば、買い物をするときに袋貰わないとかさ。エコだよエコ。それに蘭華さんの愚痴聞いたり。あれはれっきとして正義だよ。』だって。あと神様からの伝言で『梓ちゃんにこれからもがんばってね。』だってさ」

梓はぐるぐるする頭で必死で考えた。そしてひとつの疑問が出た。

「神様ってどんな人なんですか？」

そっちですか。普通、『神様に会えるの？』とか『神様っているの？』とかが気になるだろ。『神様ってどんな人？』って・・・・神様の存在を信じてしまっている梓だった。

「いや～どんな人って・・・会う？」

「会う！」

梓は一気に元気になった。神様の存在で二日酔いが吹っ飛んだみたいだ。

梓は桔娥のあとについて行って客間に辿り着いた。

「ここにいるんですか？」

「ああ。神様～入りますよ～」

桔娥は遠慮なく普通に入っていった。梓もそれに続く。

こんなに堂々と入っていいものなのだろか。

「梧娥君。あ、もしかしてその子が梓ちゃん？」

客間の中にいたのは、いかにも美男子でしょこの人！と思えるような白髪の１６歳ぐらいの少年だった。どこかかわいらしいオーラを放っていて癒される。

「は、はじめまして」

「そんなにかしこまらなくてもいいよ。僕はフィーン」

にっこり笑うフィーン。これはやばい。かわいすぎる。フィーンの周りにきらきらオーラが見えた梓はただぼーっとフィーンを見ることしかできなかった。

「この世界はね、お前暇だろ。っていうことで受け持った世界なんだ。めんどくさいから普段はウィルっていう見習いの神に任せてるし、僕は作り出した世界をどうにかしなくちゃいけなくなったしさ。あ、そうだ。あとで愚痴聞いてくれない？君が帰るためにも」

「よ、喜んで」

梓はもともと異世界とか興味があったので神様にそんな事の愚痴を聞けるなんて最高だ。

「ということで、梧娥君、出てってくんない？」

「・・・わかりました」

梧娥はしぶしぶ出ていった。

「で、愚痴なんだけどね――」

「フィーンさん、来てたんなら行ってくださいよ」

そう言って入ってきたのは今まで見たことのない男だった。見た目は梓と同じぐらいだろう。寝癖かくせ毛かわからないが所々毛先がはねている。

「誰？」

「ああ、あんたにちゃんと会うのって初めてだった。俺はウィル。ここをフィーンさんに任された神見習いってとこかな」

「ああ、そう言うことですか。あれ？でも、桔娥たちは？」

そうだ。桔娥だってこの世界を頼まれたと言っていた。なのになぜ任された神様がここにいる？どちらかだけでいいのではないだろうか。

「その事は僕が説明するよ。それぞれの世界ってね、一人ずつ神様がいるんだよ。その世界を維持するためにね。基本的に神様は任された世界を維持することが仕事だからね、ただ単に崇められている神様とは少し違うんだ。神の集会とかにも出席しないといけないし、世界との干渉を固く禁じられている。だから世界の住人を守ったりすることができない。そのために作り出された技術の中に創造物（そうぞうぶつ）と協力者（きょうりょくしゃ）ってのがあってさ、桔娥と都真、それから稀蝶は協力者なんだ」

何となくわかったような、分からなかったような。まあ、とりあ

えずウィルはこの世界に干渉できないので、楷娥たち三人が存在している。ということだろう。

「何となくわかりました。じゃあウィルはいったい今までどこにいたんですか？」

「俺はずっといたぞ。まあ、フィーンさんが大変なことになってたせいでこの世界の中心でフィーンさんの作りだした世界も維持してたから出てこれなかっただけ」

フィーンは苦笑いでウィルの話を聞いていた。いったい大変なこととは何なのだろうか。ものすごく聞きたかったが、聞いてはいけないような気がしたのであえて聞かなかった。

「そうそう。僕の愚痴を聞いてもらう前にこれを渡すよ」

そう言ってポケットから出したのは黒い腕輪だった。

「なんですか？これ」

フィーンから受け取った黒い腕輪をまじまじと見ながら梓は聞いた。

「これはね、君の世界に帰るための力を計るものだ。今は黒いけど、力がたまればその腕輪はだんだん白くなってくる。で、その腕輪が完全に真っ白になったら君は元の世界に帰る力が手に入る」

「本当ですか！」

「本当だよ。それが白くなるまで正義を貫くんだよ」

「はい！」

梓が元気よく挨拶をするとフィーンは優しい笑顔を見せた。この笑顔を見るとなんだか落ち着いた。

「でね、ウィル、僕は梓ちゃんに愚痴を聞いてもらいたいから早く出てってくんないかな？」

優しい笑顔が一瞬にして黒い笑顔になった。

ウィルは「分かりました」と呆れた風に言うとすぐに部屋から出ていった。

「さ、存分に僕の愚痴を聞いてくれ！」

それから梓は二十四時間フィーンの愚痴を聞かされた。

「神様の愚痴って、なんだか破壊力があったな・・・」

よろよろと廊下を歩いていると前からきなこ餅の入った皿を持って目の前からやってきた。何故かものすごく不機嫌だった。

「桔娥、どうしたの？」

「梓か・・・それがさ・・・」

――――一時間前――――――

「桔娥、きなこ飴、焦げるぞ」

「ああ！」

そう言って桔娥がきなこ飴のもとに向かった時にはすでに手遅れだった。

きなこ飴は黒く焦げていた。

焦った桔娥は急いで火を消して、新しいきなこを探し出してきなこを持ち上げた時、

「わっ！」

「ひゃっ！」

と声をあげると同時にきなこを台所でぶちまけた。

最悪である。きなこはその袋分しかなくて新しいのを買いに行けない。

桔娥がただ唖然と可哀想なことになったきなこを見つめいていると驚かした奴、ウィルがこっそり逃げ出した。

そのあとも桔娥はしばらくぼーっとしていたが、急に立ち上がった桔娥はきなこの入った袋が入っていた棚に手を置いた。

その瞬間、桔娥はものすごい勢いでその棚を放り投げた。

そのまま、台所をあらかた崩壊して台所を後にした。

もちろん、台所は使えない状態になってしまっている。

そして今現在にいたる。

今は片手にきなこ餅の入った皿を持っている。そしてバクバクときなこ餅を食べている。

ちなみに

「誰だ、俺を驚かした奴は・・・・」

と、犯人を探し中でもある。
丁度そこに梓がやってきた。

「あ、桔娥、さっきはごめんね」

さっきと言うのはきっとフィーンのことだろう。
梓が脅かすのは無理だな。気、失ってたし。
桔娥は梓をじっと見たまま考えていた。

「桔娥?」

梓の言っていたことを全く聞いていなかった桔娥はちょっとびっくりして、手からきなこ餅の入った皿がこぼれおちた。

「ああ!!」

「っと」

もうちょっとで落ちる寸前で梓が見事にキャッチした。

「桔娥・・・大丈夫?」

「う、うん。ありがとう。恩にきるよっ!」

桔娥はきなこ餅の入った皿を梓から受け取ると上機嫌でそこを去った。

「いったい何があったんだ?知ってます?都真さん」

「知らねえよ。どうせ俺は影が薄いんだよ。」

まったく梏娥に相手をされなかったことにものすごくショックを受けているみたいだ。相手をされなかったというか、気付いていなかっただろう。

ちょっと機嫌の戻った梏娥は今だ犯人が見つけられていない。

「誰だろな・・・・・驚かした奴」

いい方からしたらどうでもいいような気がする。

そろそろ、皿の中のきなこ餅がなくなってきた。台所に・・・梏娥は自分が破壊したのを思い出した。

今持っているきなこ餅は部屋に隠し持っていたやつであって変えなんかない。

「・・・・・最悪だ～！」

「どうしたの？」

丁度そこに稀蝶がやって来た。

「き、きなこ餅がない・・・・」

「持ってるわよ」

稀蝶がそういった瞬間梏娥の目が輝いた。

「あ、あげるわよ。だからそんな目で見ないで」

稀蝶はレジ袋からきなこ餅を取り出して桔娥に渡した。

「今日は飴じゃないのね」

「あ、飴は・・・・無くなった」

「作れば？」

「は、ははは・・・・・」

桔娥は半分瀕死の状態でどこかに歩いていった。

「え～・・・・何かホラーよホラー」

「稀蝶さんっ！桔娥をみませんでしたか？」

梓が大打撃を受けた都真を引きずりながら走ってきた。どんだけ力強いんだよ。

瀕死状態の桔娥を見た後に大打撃を受けて魂が抜けてそうな都真を見ると何事かと思う。

「こ、桔ちゃん？ついさっきあっちに行ったわよ」

「なんか桔娥、変じゃないですか？」

「へ、変ね。そいつも」

稀蝶は都真を見ていった。

梓は都真がなぜこうなったかを稀蝶に説明した。

「かわいそうね」

そのころ桔娥はまた機嫌が直ってきて今はどっちかと上機嫌だった。

「もう良いか」

桔娥は半分ぐらいどうでもよくなっていた。そしてもう気にしないことにした時、

「わっ！」

「ひゃっ！」

とまた脅かされて、きなこ餅の入った皿を落とした。

「・・・・・」

無言で悲惨な状態になってしまったきなこ餅を見ていた。きなこ餅の一つに割れた皿の破片が刺さっていてなんか残酷だ。

「おまえ・・・・」

「わ、悪かったって。」

犯人はウィルだった。

「ウィル、てめぇ・・・・。ゆるさねぇ！！」

「キャー」

桔娥は完全にキレた。
屋敷中に桔娥のどなり声とウィルの叫び声が聞こえる。でも、ウィルの叫び声はなんだか楽しんでいるように聞こえる。
最終的に、桔娥はきなこ不足のせいか、の体力が先になくなってウィルが逃げ切ったのは言うまでもない。

神と創造物と協力者（後書き）

なかなか説明がうまく書けません・・・。

「世界に一人ずつ神様が存在する～」

的な事はただの自分の想像です。
基本的に自分の考える小説にはそういう要素が所々見え隠れがしています。

それにフィーンさん中心の話も書いてます。
まあ、それはちゃんと出来上ってないんですけどね。

俺が保証してやる（前書き）

めまぐるしく色々なことが短時間で起きます

俺が保証してやる

稀蝶は桔娥をじっと見ていた。
桔娥は今、きなこ飴を作るために必死に台所を片付けていた。それを梓が手伝っている。いや、どっちかというと・・・梓だけが片付けている。
桔娥はきなこを食べてないせいで力が出ず、小さなものも持ち運べない状態だったりして、必死に片付けているのだが、片付けてれていない。
かわいそうに思っている稀蝶だが、手伝う気もさらさらなく、ただ見ているだけっていうのもあれだが。

「あとちょっと～」

梓は持前の力で次々に片付けて行く。しかも、結構重いものも軽々と持ち上げているような気がする。
稀蝶は梓が怖くなって目をそらした。
目をそらした先には、桔娥の代わりに梓がぼこぼこにした、ウィルがいた。顔は死守したようでまったくあざがない。他はボロボロ。
都真はショックのあまり寝込んでる。ただの馬鹿だ。

「梓ちゃん、桔ちゃん邪魔じゃない？」

「あ、大丈夫ですよ」

梓はにっこり笑う。横では桔娥が倒れそうになりながらもよろよろと物を運んでいる。
それから十分、全部合わせて一時間で台所は片付いた。ほとんどが梓のおかげである。

「はー、片付いた。桔娥、きなこ飴作れるよ」

梓はそう言ってさっさとその場から消えてしまった。たぶん都真の看病だろ。働き者だ。

桔娥は急に元気になってエプロンを着て早速きなこ飴を作り出した。

「桔ちゃん、きなこ飴、今度はちゃんと作りなよ」

「分かってるって」

ものすごく上機嫌だ。分かりやすい。

「きなこ〜きなこ〜」と、なんか意味不明な歌を歌っている。

稀蝶は横で倒れてるウィルを手当てすることにした。

「ウィル、手当てしてあげる」

「俺は本当にここを任された神なのかな？」

いきなり凄いことを言うウィルだ。まあ、こんな扱いを受けていれば思ってしまうだろう。

「そ、そうなんじゃない？ほらあれよ、みんなウィルが好きなのよ。愛のムチってやつよ」

「そっかっ！」

すごくうまいことごまかしたような気がする。

「と、とにかく早く怪我を手当てしないといけないからね。ほら、立って。触ったら痛いでしょ」

「あ、ああ」

ウィルは立ち上がって稀蝶の後についていった。

「やっとみんなどっか行ったよ」

何処からか、フィーンが出てきた。

「やあ」

「こんにちわ。どう?きなこの調子は」

「今作ってるところです」

「いいにおいだね。一口もらうよ」

フィーンはそう言って鍋の中のきなこ飴をスプーンですくって口の中に入れた。

「うんっ、うまい」

桔娥はフィーンの食べるところを見て待ちきれなくなったのか、自分もスプーンですくってたべた。

口に入れた瞬間に桔娥の表情が変わった。ものすごく幸せそうだ。

「あ、私も食べたい」

稀蝶はすぐにウィルの手当てを終わらせて桔娥のところに戻ってきた。
そして桔娥が何かを言う前に食べてしまった。

「おいひい」

桔娥は稀蝶のおいしそうに食べてる様子を見てまた食べてしまった。
桔娥は今までにない長期間できなこを食べてなかったのでバクバクと食べた。
そして、きなこ飴が完成する前に無くなってしまった。

「・・・ま、いいか！また作ったらいいし」

なんて勝手な奴なのだろうか。でも、そこが良いところなのだろう。

丁度一か月たったぐらいでフィーンにもらった腕輪はだいぶ白くなってきた。今、ちょうど半分ぐらいだろう。
梓は二日間のうちに半分を白くした。
桔娥の片付けを手伝って、都真の看病をして、蘭華の愚痴を聞いて、てな感じで毎日やっている。
そのせいか、梓はちょっと疲れた様子だった。

「梓、大丈夫なのか？」

ごろごろしている梓の横に座ったウィルは梓の額に手をあてた。

「大丈夫ですよ」

梓はあははははとか言いながらゆっくり起き上がる。
ウィルは梓を支えた。

「お前、熱あるぞ。頑張りすぎだ」

地味に優しいウィルだったりする。そこがウィルの良いところだ。
しかし梓は、自分は全く頭は痛くないし、身体がだるいだけ、という理由で熱ではないと判断する。簡単に言えば自分のことに関すると分からなくなるという、そのへんにありそうなパターンだ。

「大丈夫だって」

「大丈夫じゃない。年上の言うことは聞いた方がいいぞ」

どう見ても梓の方が年上に見える。ウィルの身長が低いせいだろうか。

「ウィルって、何歳？」

「百以上。百まで行くと数える気なくなってさ。今じゃ本気でわからない」

梓は固まることしかできなかった。
百歳以上って老人。つまりロールプレイングゲームで言う長老的存在なわけだ。

「長老・・・・」

「誰が長老だ！」

ウィルは思わず怒鳴ってしまった。はっと思った時には既に梓の状態は悪化していた。
余ほど無理をしていたらしい。目を回している。

「馬鹿なこと言うからだろ。なんで梧娥といい梓といいこんな無茶する奴が二人もいんだよ」

ウィルは悪態をつきながらも押入れかから布団を取り出して、ささっと布団を置くとそこに梓を寝かした。

「にしても、こいつどんだけ倒れたりすんだよ」

確かにそうだ。こっちに来てからまだ一か月ぐらいしかたっていないのにこれで三、四回ぐらいではないだろうか。実は今まで梓を見守っていたウィルは梓が落ちて来たときのことから今日のこのときのことまでを全部知っている。
すでに眠ってしまった梓の寝顔を見ながらウィルはいろいろ考えていた。
もっと楽に正義を行うことはできないのだろうか。
しばらく考えたウィルだが最終的になにも思いつかなかった。ウィルは百年以上生きてきたが、そこまで頭はよくない。どちらかというと悪い方かもしれない。
ウィルはあきらめて都真に相談することにした。この家でこういうことに関して頼りになるやつは都真ぐらいしかいない。
ウィルはすぐに行動を起こした。

「都真」

都真はまた机に向かっていて何か仕事をしている。

「んだよ。忙しんだが・・」

都真は手を止めてウィルを見た。

「あのさ、梓の正義のことなんだけど・・・」

「神が干渉していいのか？」

「あ・・・忘れてた・・・・そういや俺って、見守ることしかできないんだっけ」

「正しくはな。でも、この世界を守るためなら別によかったと思うぞ」

都真はあえて遠まわしに言った。

しかし、ウィルは意味が分からないわけで無駄だった。

都真はいちいち言い直すのも面倒なので、「諦めろ」と一言言って仕事に戻った。

それから三週間ほど経って腕輪は真っ白になった。

なのに帰り方が分からずそのままトーキョーにいる。

「ああ～どうやったら戻れるんだろう」

帰り方の分からない梓は日に日にやる気をなくし始めている。

腕輪が真っ白になってから、自分の中にある力みたいなのが感じることができるようになった。

あとは帰る方さえ分かれば戻れるのだが、桔娥も稀蝶も都真も、頼みの綱だったウィルも知らなかった。

あと頼れるのはフィーンなのだか、最近姿を現さない。桔娥が言うにはフィーンはまた大変な目に合ってるらしい。
今、梓ができることはフィーンが死んでいないことを願うだけ。

「梓、出かけるけど来るか？」

ごろごろとしていた梓を誘ったのは桔娥だった。
桔娥はやる気をなくし始めている梓を心配していて、街に出かける時によく誘いに来る。
梓は桔娥の顔をじーっと見た。桔娥は梓のことを心配そうに見ていた。いや、実際に心配してるのだが。

「行く。だからそんな顔しないでよ」

桔娥の表情に負けた梓は起き上がって部屋を出ていった。なぜか誘った桔娥が梓の後を追いかけた。
二人はのんびり街の中を歩いた。

「桔娥、私は本当に戻れるのかな」

梓は最近同じことを聞いてくる。それぐらい心配なんだろう。

「戻れるって。俺が保障してやる。フィーンもあの戦いが終わって一息ついたら来てくれるって。あいつは絶対に変える方法知ってるから安心しとけ」

「うん」

梓は首からぶら下げているネックレスをぎゅっと握った。これを握るとなぜか落ち着く。

「どけどけぇ！！」

そんな声が梓たちの前から聞こえてきた。誰かが何かをやらかしているらしくてそこらじゅうから叫び声が聞こえてくる。

もちろん、梓は今までの癖で正義をしようとそいつを止めようとする。

「こら！あんたは何をしてるのよ！」

梓は威勢良く何かをやらかしているらしい男の前に立ちはだかった。

梓の登場に焦った男は急停止した。

「なんだよ、お前は？あ？」

男は片手にナイフを持っている。それと男には不似合いな女ものカバンを持っている。

「あんた、もしかしてひったくり？」

「悪いか？」

「悪いわよ。それをちゃんと持ち主に返しなさい」

梓は腰の刀に手をかけようとしたが、刀を腰につけていなかった。

最近だらだらしていたせいでうっかり忘れていた。

「武器なしに俺を捕まえられるのか？」

男はそう言って梓に飛びかかってきた。
やばすぎる。
武器がないうえ男は長身で思いっきりやばそうな奴だ。梓は怖くなって目をつぶった。

「馬鹿っ！」

桔娥のその声が聞こえた瞬間、梓は何かに包まれた。
その何かを確かめようと梓は目をあけた。

「桔娥っ！！」

梓を包んでいたのは桔娥だった。

「大丈夫か？」

「う、うん」

「よか・・・・た・・・・」

桔娥は崩れるように倒れた。
梓は何がなんだかよく分からなくて桔娥を抱き上げた。

「桔娥さん？」

梓は手になにかぬるっとしたものを感じた。
梓はそれを恐る恐る見た。
梓が見たものは桔娥の脇腹から流れる血だった。

俺が保証してやる（後書き）

桔娥君大ピンチです！！

ありがとうございました（前書き）

前回よくわからんやつに刺された桔娥。

それを目の前で見た梓は・・・・

ありがとうございました

「おまえ、命拾いしたな」

桔娥を刺した男はあざ笑うかのように言った。
梓はゆっくり桔娥をその場に寝かすと立ち上がった。

「・・・ない。あんたなんか許さない！！」

梓がそう言った瞬間、梓の周りから何かが出てきて男に直撃した。
男はその何かを確認することができずに気を失ってしまった。
男が気を失ってからも梓は我を忘れて暴れまくった。街は梓の繰り出す何かに襲われてぼろぼろになっている。

「梓ちゃんっ！」

そこにフィーンがやってきた。暴走する梓に近づく。
梓が繰り出す何かはフィーンにも飛んでいったがなぜかフィーンの手前ではじき返されている。

「くそっ、なんて力だ。これが梓ちゃんに秘められた力なのか！」

フィーンはそう呟いた。
梓の攻撃はだんだん弱くなってきた。力がなくなってきたのだろう。

「梓ちゃん落ち着いてっ！」

やっとのことで梓に声が聞こえたようで梓がフィーンの方を向い

た。

「フィーン・・・・さん？・・・・・こ、桔娥が・・・・」

梓はそう言って気を失った。力を使い果たしたのだ。
フィーンは梓に近寄ると抱きかかえた。

「梓ちゃん、何で暴走なんか・・・・。って桔娥っ！！」

どうやら梓の言葉をフィーンはあまり聞いていなかったようで、
今更横たわる桔娥に気が付いた。

「原因はこれか・・・」

フィーンはそう言って桔娥を担いだ。
二人を軽々と持ち上げたフィーンは急いで屋敷に向かった。

屋敷に辿り着いたフィーンは引き戸を蹴破って家の中に入った。

「ちょっとっ！！早く薬と包帯を！桔娥がっ！」

フィーンの慌てふためく声を聞いて、ウィルと稀蝶と都真が駆けつけてきた。

「フィーン様、どうしたんですかっ！」

稀蝶は急いでフィーンに駆け寄った。
フィーンは担いでいた稀蝶に梓を渡すと桔娥を床に寝かした。

「都真、ここにあるありったけの消毒薬と包帯持ってきて。早くしないと桔娥が危ない」

フィーンは桔娥のさされたところを必死で抑えた。止血するためだが、なかなか血は止まらない。

都真は何がなんだかよく分からなかったが、急いで消毒薬と包帯を取りに行った。

「フィーン様、桔ちゃん、どうしたんですか？」

「さされた」

そう聞かされた稀蝶の顔から血の気が引いた。

「うっ・・・」

「あ、梓ちゃん。目が覚めたの」

眼が覚めた梓は少しぼーっとしていたがすぐ我にかえった。

急いで稀蝶の腕から降りる。

「桔娥は！」

「大丈夫。まだ生きてる」

梓はフィーンの横に座った。

梓はすぐそこにあった桔娥の手をぎゅっと握った。

「フィーンさん、どうにかできないんですか・・・」

「普通なら僕がするべきなんだけど・・・さっきまで戦ってて神力・・・つまり君が集めていた力をほとんど使っていてね。僕にはどうしようもないんだ。」

「ってことは・・・私にはできるんですね。私はその力を集めたから」

梓は期待を込めていった。桔娥を助けれるという期待を。

でも、フィーンの言葉は期待を裏切った。

「いや、無理だよ。まだ神力を使ったことない君には無理だ。それに、さっき暴走したばっかりだしね。」

「大丈夫です。私は大丈夫だから！お願いしますっ！」

梓は叫ぶように言った。

「梓ちゃん。君はもともと神力のない子だったから死ぬことはないと思うけど・・・元の世界に戻れないよ」

「いいです」

梓の言葉はなにを動かすような力があった。

元の世界に戻れない。つまりそれは、一生この世界に住むということだ。

フィーンは梓の決意を確かめるように頷くと桔娥の血で汚れた手で梓の手を掴んだ。

「分かった。じゃあやり方を教えるからその通りにやって」

「はい」

梓は深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。

「じゃあ行くよ。まずは桔娥の中に自分の神力を流し込むんだ。ゆっくりだよ」

「はい」

梓は言われるように自分の中にある力をゆっくりと桔娥の中に流し込んだ。

力を扱うのは初めてだが、フィーンのおかげもあってちゃんと使えるようだ。

「うまい。初めてにしては上出来だ。ちょっとしたコントロールとかは僕がやるから安心してね。じゃあ、次は流し込んだ神力を傷口に集める」

「はい」

梓は目をつぶって桔娥の中に流し込んだ力を感じた。力を感じることができるとその力を徐々に傷口へと集める。

すると桔娥の傷口が光った。

「え？なに？」

「安心して、ちゃんと集まってる証拠だから。そのまま、しばらく力を保っておいて」

「は、はい」

結構きつい。力を一定の場所に集め続けることがこれほど難しいとわ思わなかった。
だんだん梓の額に汗が浮き出てきた。

「頑張って、梓ちゃん。もう少しで傷口がふさがるから」

「はい・・・」

梓は目をつぶってもっと集中した。
それから何時間たったか分からない。
梓はいつの間にかねていた。

「わ、私・・・・！桔娥はっ！」

「大丈夫だよ。梓ちゃんのおかげでちゃんと傷口はふさがった」

梓はほっと溜息をついた。
しばらくすると桔娥が目覚めた。

「あれ?俺どうしたんだっけ。」

「さされたんだよ」

フィーンが優しく教える。
その横で目に涙を浮かべている梓を見た桔娥はどうしたら良いか分からなくなった。

「ど、どうしたんだよ・・・」

「い、いや・・・桔娥が生きてて本当に良かったと思っただけ」

恥ずかしそうに梓は言って涙をぬぐった。

桔娥が上半身を起こすと首をかしげた。

「あれ?全然痛くない。どうしてですか?フィーン様」

桔娥の質問を聞いた梓はフィーンが答える前に部屋を出て行ってしまった。

その行動がよく分からなかった桔娥はまた首をかしげた。

「あのね、桔娥。桔娥の怪我が治ったのは梓ちゃんのおかげなんだよ。梓ちゃんが神力を使って桔娥の怪我を治したんだ」

その言葉を聞いた桔娥は勢いよく起き上がると梓を追った。

梓は自分の部屋でこれからのことについて考えていた。

元の世界に戻れないならここにいるしかない。でも、一生目覚めないあっちの世界の私のからだはどうなるんだろうか。

病院でずっと布団に寝かされて、戻ってくることのない魂をまってるんだろうか。

そして、その横でまた、お父さんが私の顔を悲しそうな目で見るんだろうか。

そう思うと戻りたくて仕方がない。

こっちの世界にきて初めて買ったネックレスをぎゅっと握りしめた。

このネックレスはお守りのようにずっと身につけている。そのおかげか、これを握ると安心する。

やっと落ち着いた梓のもとに桔娥がやってきた。

「梓！ごめん！」

いきなり謝られた梓はただ唖然とすることしかできなかった。

「あ、あの・・・・いきなりなに？」

「い、いや・・・その・・・帰るために集めてた神力を俺のために・・・。」

「仕方ないですよ。人の命には代えれませんから」

その梓の一言に桔娥は号泣し始めてしまった。

「ちょ、桔娥さん泣かないでくださいっ！」

梓が慌てて立ち上がった時、服の中に入れていたあの腕輪が出てきた。

変えるために集めた力の量を計る腕輪。

「あっ・・・・」

梓はその腕輪を拾ってぎゅっと握りしめると外に投げようとした。

しかし、投げようとした手をいつの間にか梓の後ろにいたフィーンに止められた。

「ちょっと、その腕輪見せてくれないかな？」

そういって、受け取ると腕輪をじっと見てから梓の額に手をあてた。

「・・・神力が・・・・ある？」

フィーンは驚きの様子を隠せないようだった。

「ど、どういうことですか？」

「戻れるってことだよっ！神力がさっきの桔娥を救ったことで使った神力を上回ったんだよっ！」

フィーンの言葉に梓はどう反応したら良いか分からなかった。

本当は喜ぶべきなんだろうが、うまく自分の気持ちを表現できない。

というわけで、唖然とすることしかできなかった。

「か、帰れるって本当なんですか！？」

やっとのことで言葉が出た。その勢いのままフィーンの胸倉を掴んで思いっきりがくがくと揺らした。

「お、、落ち着いて～～！」

「あ、すみません」

梓は慌てて手を離した。

乱れた服を着なおしたフィーンが梓の頭を優しくなでた。

「よく頑張ったね」

その言葉を聞いた瞬間、梓の目から涙が出てきた。

フィーンは自分の胸で可愛く泣く梓をぎゅっと抱きしめた。

しばらくして、梓が落ち着くとフィーンは梓を屋敷の地下室に連れていった。

稀蝶や都真には無理やりついてこようとした桔娥を止めてもらっている。

梓の治療のおかげで怪我は治っているが、今動くとまた傷口を開くからである。

「ここは？」

「ここはね、こちらの来たときの時間頃に戻れるようにするために特殊な魔法がかけてあるんだ。だから、たぶん・・・梓ちゃんがこっちの世界に来たときから一週間の間に戻れると思うよ。」

「でも、フィーンさんは前に普通のところで異世界に行きましたよね」

「ああ、僕は特別なんだよ」

フィーンはそう言いながら部屋の明かりをつけた。

さっきまで真っ暗で何も分からなかったが、この部屋には家具も何もない。

「そう言えば、梓ちゃんは都真の力で向こうの今の君の身体の状態を知ってるよね」

「はい」

「じゃあ、その時の様子を思い浮かべてごらん。できるだけ鮮明に

ね」

梓はこくりと頷くと目をつぶって、あの時の様子を思い浮かべた。

「出来たようだね。じゃあ次はそこに神力のゲートを思い浮かべて」

「神力のゲート？」

梓は訳が分からなくなって目をあけた。

「あ、ごめんごめん。こんな奴だよ」

フィーンはそう言って神力を使って扉を創った。真っ白でシンプルな扉。

「そう言えば・・・神力ってなんなんですか？」

梓は今まで気になっていたことを聞いてみた。正直、今さらである。

「神力って言うのはね、どの世界にも存在しているんだよ。ただ、その世界にどれだけ定着しているかとか、どれぐらい神力が強いとかいろいろあるんだけどね。その世界に神力が伝わっているかいないかはそこの神が決めてるんだ。確か・・・・梓ちゃんの世界の神は・・・クランだったね。あいつは神力が嫌いだからな・・・・。ま、とにかく、神力って言うのは誰もが持ってる力だよ。魔力と近いかもね」

フィーンの長い話が終わった。正直意味不明だが、今は早く帰りたいのでそこまで深く聞かないことにした。

「じゃあ、もう一度最初から。ああ、そうそう、神力のゲートを思い浮かべる時、その神力のゲートに自分の神力も込めてね」

「はい」

梓は目をもう一度閉じて元の世界にある身体、真っ白な病室を思い浮かべた。そして今度はその場所にさっきフィーンに見せてもらった神力のゲートも付け足した。

「フィーンさん、できました」

「じゃあ次は君の横に同じ神力のゲートを創って」

「はい」

梓は目をつぶったまま自分の横に神力のゲートを創った。

「うん、ちゃんと出来てる。最後に二つのゲートから神力を伸ばして、その二つのゲートから伸びた神力でトンネルを創って」

「はい」

梓は、さっきより集中して、二つのゲートから神力を伸ばしてトンネルを創った。

額に汗が浮かんでいるのが分かる。あともうちょっと、後もうちょっとで繋がる。

「つながった!!」

梓はトンネルがつながった瞬間目をつぶったまま叫んだ。

「気を抜いちゃダメだよ。そのままトンネルとゲートを安定させるためにそれぞれに神力を集中して。神力をトンネルとゲートに流し込むんだ」

「はい」

梓は二つのゲートとトンネルに集中した。さっきより結構きつい。

「いい感じだよ。そう、そのまま・・・・もう大丈夫。ゲートもトンネルの安定した。そのまま神力を保って目を開けてごらん」

梓はフィーンの言われる通りに目をあけた。

すぐ目の前にはゲートがあった。

しかし、自分の創造していたゲートと少し違った。色が違う。フィーンのゲートが真っ白だったので自分も真っ白を思い浮かべていたのだが、梓の創ったゲートはピンク色をしている。

「あれ？」

「どうしたの？」

「なんで私の創ったゲートはピンク色なんですか？」

「ああ、そのこと。梓ちゃんの神力の色がピンク色なんだよ。ゲートはつながってるから安心していいよ」

フィーンは優しい笑顔を見せてくれた。この人は本当に優しい人だとつくづく思う。

「ゲートをくぐれば元の世界に戻れるよ」

「ありがとうございます。でも・・・梧娥達に別れの挨拶が出来なかったのが心残りです。」

梓はしょんぼりとした様子でゲートの入口に立った。

と、その時フィーンが何か思い出したようであっっと声を上げた。

「あっ・・・そうそう。このゲートを創ると創った人に神力が定着するんだ。だから、これから何回でもこっちの世界とあっちの世界を行ったり来たりできるよ。だからまたおいで」

フィーンがにっこり笑う。

どうしてそんな大切なことを言ってくれないんだこの人は!っと梓の脳裏にふと浮かんだが、あまりの嬉しさにその思いはけしとんだ。

「本当なんですか!?」

「本当本当。一回創ったからもう簡単にできるようになると思うよ」

「はい!ありがとうございました!また来ますね!」

梓はにっこり笑ってゲートの中に入ってしまった。

光の中に梓が見えなくなった瞬間、地面が大きく揺れた。地震だ。

「やばい!梓ちゃん!」

フィーンはゲートをくぐろうとゲートに駆け寄ったが、あとちょ

っとのところでゲートが消えてしまった。

「やばいな・・・大丈夫かな?」

ありがとうございました（後書き）

とりあえず、第一章終わりです。

次回から第2章になります。

いきなりわけがわからん！（前書き）

もう本当にタイトルと同じでわけのわからん話です。

シリーズ的な感じなもんで・・・・とにかく！

そうやって話は進んでいきます。

いきなりわけがわからん！

梓は病院のベットの上で目が覚めた。

「・・・ゆ・・・・め？」

梓はそう一言つぶやいて上半身を起こした。
なんか、頭が痛い。車にひかれたからか。
梓は病室を見回した。誰もいない。
病室から出ようと梓はベットから降りた。

「きゃっ！」

体がうまく動かない。梓はバランスを崩して床に倒れた。

「しっかりしろ！私！」

梓は自分で自分を励まして、やっとのことで立ちあがった。

『梓、まだ目が覚めないかな？』

『さあ、病院の人が言うには全く分からないんだって』

がらがら

誰かが梓のことをしゃべりながら誰かが病室に入ってきた。
梓はうまく動かない身体で入口に近づいていった。とにかく、早く誰かに会いたい。そういう気持ちが梓を動かしていた。
ゆっくりゆっくり梓は誰かに近づいていった。そして、やっとの

ことで誰かのもとに辿り着いた。

「あのね、私、目が――」

ゆっくり顔を上げた梓の目には２０歳ぐらいの女一人と男二人が立っていた。全く知らない人たちだ。

しかし、向こうは梓のことを知っているようで三人が同時に梓に抱きついてきた。身体をうまく動かせない梓はその勢いで倒れた。

「だ、誰ですか！」

「あ、ごめんごめん。そりゃあれから十年もたってたら誰だか分からないか」

梓はその声を聞いた瞬間涙が出てきた。

私はこの声を知っている。

「た、拓斗？」

ゆっくり自分から離れた三人の仲のいい友達を涙がたまった目で見た。ぼやけてよく分からなかったが拓斗は頷いた。

「じゃあ、渚に優？」

梓は涙をぬくって二人も見た。渚と優も頷く。

梓は嬉しくなってすぐに立ち上がって三人に抱きついた。

「会いたかったっ！！」

あれ?十年?梓の頭の中にそれが出てきた。

「ねぇ・・・・私どれぐらい寝てたの?」

「十年間だよ。死んだように寝てるし、身体は全く成長しないし、正直怖かったな。」

拓斗が梓の頭をなでながら言った。

「ごめん。私トイレ行ってくる」

梓は感動の再会を後にして病室を抜け出した。

病院の誰もこなさそうな所に着いた梓はその場にしゃがみこんだ。

「あれが・・・夢じゃなかったらどうにか出来ただろうに・・・・」

「夢じゃないぞ」

梓は急に後ろから声をかけられたので振り向いた。

後ろには優がいた。

「急にどっか行くからびっくりしたんだぞ」

「ちょっと、夢じゃないってホント?てか何で知ってるのよ」

「きつい女になったな」

優はにっこり笑った。

「俺はな、一応天使っていう役割でな。いろいろ知ってる」

正直意味不明だ。こいつが天使？ありえない。
いまいち信用できなかった梓はゲートを創った。今回は一瞬で全部が出来るようになっていた。

「ちょっとまて。今いってもお前じゃ帰れなくなるぞ。それどころかどっちの世界にも行けなくなる」

梓は優をじっと見た。こんな真剣な顔をした優は初めて見たような気がする。いつもへらへらしてる優がこんな顔をするのを知らなかった。

「す、優。本当なの？」

「ああ。さっき、フィーンが伝えてくれた」

「フィーンさんも知ってるの？」

梓は驚きのあまり、ゲートに集中出来なくなってしまってゲートが消えた。
優は平然としていた。

「当たり前。俺は一回、フィーンのいる世界に行ったことがあったから」

「いつ？」

「う～ん・・・お前が車にひかれて、それから数か月後ぐらいに行った。」

「なんで？」

もともと、優はこっちで生まれたはずだ。だって拓斗と幼馴染だし。行く理由なんてそんなにあるとは思えない。

「えっとなぁ・・・拓斗の中になんか入って、それで・・・・・・まぁいろいろとな。てか、話すのがめんどくさい」

やっぱりか。っと梓は思った。優はめんどくさがり屋だから話してくれるとは思っていなかった。

とにかく病室に戻ろうということになって二人は病室に帰った。

病室に戻ると拓斗と渚がなんかもめていた。

「どうした？」

優は拓斗と渚の頭の上に手を置いた。この時代では優がお兄さん的存在みたいだ。梓が車にひかれる前までは優は子供っぽかったのに。

「渚の野郎が梓を家に泊めるっつたんだ」

「え？どういうこと？」

梓は訳が分からなくなっていた。

すると優が梓の顔の高さに合わせてしゃがんだ。なんかうざい。

「あのな梓。落ち着いて聞いてくれよ。お前のお父さんとお母さんは死んだ。ま、詳しくはあとで教えるけどな」

そう普通の声で言った後にこそっと優はつけくわけた。

「少し事情があるんだ。普通の人間は知らない事情がな。それと、ちょっと大げさな感じで泣け」

なんか酷い気がするのは梓だけだろうか。大げさに泣けってなんだよこの野郎っ！って叫びそうになったが、それはこらえて優の言われたとおりその場にしゃがみこんで泣いた。

なぜか自然に泣かなかったのは優がこそっと言ったことに引っかかってるからだろう。

「梓・・・」

「で、梓の泊まるところなんだけど。俺の家にして、お前らも泊れ」

梓は泣き真似をしていたが笑いがこらえきれず大声で笑ってしまった。

もちろん、拓斗と渚は「え？」という顔をして梓を見た。優は頭を抱えた。どうせ、何やってんだよこいつ。とでも思っているのだろう。

「ご、ごめん。優が命令形で言うから面白くて」

「梓の笑いのつぼって・・・・・よく分からないな」

梓はむかっとして拓斗に近づいて頭を殴ろうとしたが、拓斗の背が高くなっていて手が届いてもそこまで痛くないと思ったので、腹を思いっきり殴った。

拓斗はその場に腹を抱えてしゃがみこんだ。結構痛かったらしい。

「と、とにかくそうしましょ。梓もいいでしょ？」

渚は戸惑いながらも話を先に進めた。

戸惑っている理由は梓の拳をくらった拓斗がものすごく痛そうにしているからだろう。

「うん」

あとは何の話もなく梓は退院した。

退院ってこんな簡単にしていいものかよく分からなかったが流れ的にそうなった。

優の家に向かうのに車に乗った。

優たちは二十歳（はたち）を過ぎているので車が運転できるのだ。

梓は優が運転する車の助手席に座った。後ろでは拓斗と渚が寝ている。

「もしかして、優がなんかしたの？」

「さあな」

なぜか優は楽しそうに言った。こんなに謎めいた奴じゃなかったような気がする。

しばらくして優の家に着いた。

梓は優の家を見た瞬間気が遠くなってしまった。

「なんであんた、こんな所に住んでんの」

梓の目の前にあった優の家は結構でかくてどんな金持ちが住んでるんだよ。っていう反応を誰もがするような豪華な家だった。

「俺は天使だから」

拓斗達が横にいるので優は梓の耳元で言った。
優の家の広すぎる風呂でシャワーを浴びた梓は優の服を借りた。
結構優の服はでかくて裾をまくるのが大変だった。

「気持ちよかった～」

「それはよかったよ」

梓が風呂からあがると晩御飯の準備ができていた。
どうやらカレーらしい。
そう言えばここずっと和食ばっかりで飽きていたのでこういうのを食べられるのが嬉しい。たぶん、優の気遣いだろう。

「ほら、早くいこっちに来いよ」

拓斗が手招きをしながら梓を呼んだ。
梓が椅子に座ると渚がケーキをこっちに持って来た。結構これも豪華だ。

「ねえ、これも優が天使だから?」

梓は隣に座っている優にこそっと聞いた。

「違う、違う。拓斗が作ったんだ。意外だろ」

「え、マジで・・・・あいつにこんなもん作れる技術があったの?」

「おい、聞こえてるぞ」

どうやら梓と優の会話は拓斗に聞こえていたようだ。結構怒っている。

「びっくりでしょ。拓斗ったらこういうのに目覚めたのよ。試食に付き合わされるからとても迷惑してるのよ」

渚が重たそうなケーキを置いた。机がミシッといったような気がするが無視しておこう。

拓斗は立ち上がってケーキを切るために包丁を取った。

もうちょっとで包丁がケーキに当たる寸前で梓が止めた。

「ちょっと待って。あのさ、カレーにケーキって・・・・・・あうの？」

梓の言葉で拓斗が包丁を止めた。

「・・・・・・あわない」

優が少し間を開けてから言った。

渚も頷いている。

「明日にしようか」

「私ケーキのほうが良いっ！」

梓が輝いた目で叫んだ。

三人は梓の意見を受け入れてカレーを食べるのをやめてケーキを食べることにした。

二ホール分ぐらいあるケーキを食べ終わった三人は満腹感と吐き気に襲われていた。唯一、普通にしているのは梓だ。

「ああ～気持ち悪い」

「そう？とても美味しかったよ」

三人はけろっとしている梓をまじまじと見た。

梓はふかふかのベットの上で横になっていた。
暗闇の中で梓は考えていた。
いったい今何が起きているのだろうか。
向こうの世界ではいったい何が起きている。
もしかして、あの世界の人たちが危険な目に会っているんじゃないのだろうか。
一人でいると涙が出てくる。
私は何もできない。

ガサガサっ　ドサっ

「いだっ」

梓がだんだん暗くなっているところに外で物音がした。
外で誰かが落ちたようだ。
その前になぜ人間が空から降ってくるか意味が分からない。それに外はただの庭だ。何かが落ちると言ったら上の階から人が落ちるぐらいだ。でも、ここの上は屋根だ。部屋なんて何もない。

梓は涙をふくと窓に近寄って言って外の様子を見た。

「よっ」

梓は落ちた人物を少しの間、無表情で見た後、ベットに戻った。

「ちょっと待てよ！」

落ちた人が窓から侵入してきた。

「なんですかいったい」

「なんだよ。久しぶりに会えたのにそんなにつれなくするなよ」

空から落ちてきた人は桔娥だった。

しかし、着物じゃないし、赤毛じゃなく黒髪だから正直誰だか分からない。

唯一、桔娥かなぁ、と思わせるものが一つあった。首からぶら下げている赤い薔薇のネックレスだ。

「誰ですかいったい」

梓は桔娥だと分かっていたがあえて聞いた。そもそも、こっちの世界にいることが信じられないのだ。

「俺だよ、俺。桔娥だよ」

梓はまじまじと桔娥の顔を見てにっこり笑った。

「な、何だよ。」

「いや、桔娥だなぁって。てか何でこっちにいるの？」

「いやな、フィーンさんに頼まれて。なんか大変だから急いで梓を連れて来いってさ。俺たちは一応特別だからどんな場合でも移動できるんだ」

梓はへぇーと適当に納得していた。

桔娥はどかっとソファーに座るとポケットからきなこ飴を取り出してなめ始めた。

「それ、こっちにもあるんですか」

「ああ。前に俺が来たときに作った」

前に来たって・・・来たことあるんだ。と梓は思っていたがふとさっきの桔娥の言葉を思い出した。

「さっき、『俺達』って言いませんでしたか？」

「ああ。言った」

「稀蝶さんと都真さんも来てるんですねっ！あ、もしかしてウィルも？」

「俺はついでかっ！」

桔娥の肩にいつの間に何か得たいの知れない物体がのっていた。

それがうさぎっぽいものだとわかるのに少々時間がかかった。でも、あくまでうさぎっぽいものであってうさぎではない。うさぎにして

は小さいし、何より尻尾が長い。
桔娥は鬱陶しそうに見たがすぐに梓に向き直った。
「ああ。来てる。で、ちなみにこれウィル」
「これって言うなっ！」
桔娥の肩にのっている何か――ウィルが桔娥の頬を叩いた。全くいたそうでない。
梓は桔娥の横に座った。
桔娥の横は落ち着く。さっきまでの考えがどうでもよくなってしまった。
「稀蝶さんと桔娥さんはどこにいるんですか？」
桔娥の動きが止まった。
梓は首をかしげて桔娥の顔を見た。
「稀蝶と都真は・・・途中ではぐれた」
「え・・・」
梓はそう言うしかなかった。
ほかに言葉が出てこない。
桔娥の顔から血の気が引いていった。とても不安そうな顔をしている。

いきなりわけがわからん！（後書き）

帰ってきていきなり１０年後じゃだれでもびっくりするよね。

そしてやってきた桔娥の爆弾発言。

「途中ではぐれた」

っておい！！

いったい二人はどこに行ったのでしょう・・・・

疲れてるんです（前書き）

とりあえず

わけのわからん話が続きます

疲れてるんです

桔娥と梓はとりあえず、ここまでの事をまとめてみた。

「まず、お前が平行世界にやって来た。で、なんとかして帰った」

「で、私が帰ったらこっちの世界は十年後になってて、お父さんとお母さんが死んだらしい」

「俺はフィーンさんに稀蝶と都真、それからウィルと一緒に梓を連れて帰るように言われた」

「でも、桔娥は稀蝶と都真とはぐれてしまった」

何となくわかったようなわからないような。とにかく、今は何となくピンチだという事だけがわかる。

悩んでいる時に、ふとある一人の人物を思い出した。

「そうだ、優！あいつ、なんか天使でフィーンさんの事も知ってるみたいな感じだった！」

「スグル？そいつは今どこにいるんだ？」

「えっとね・・・・・・」

「お呼びかな？」

急に後ろから声をかけられたので二人とも同時に驚いた。

後ろを振り返ると優が笑顔で立っている。

「ども・・・・・・」

「君が桔娥？俺は優ね。一応梓の友達ってところかな。そんでもって天使だ」

「ところで、天使って何の役割なの？」

梓がそう言うと優は感心するような顔をした。ちょっとムカつくが、ここはあえて耐えておく。

「梓は役割の事も知ってるのか。まあ、簡単に言ったらその世界で独断に行動している生まれた時から特別な力を持った人って思ったらいいよ。たまに超能力者とか言ったりもする。俺は超能力者っていうより天使って言ったほうが好きだから天使って言ってるだけ」

「協力者である俺は何にも力がない」

だんだん頭が痛くなりそうだ。

「つまりは・・・・・・超能力者と天使は意味的にはいっしょなのね。でも・・・・・・そんな人たちの事フィーンさんに聞いてない」

桔娥がきょとんとした様子で梓を見る。

確か、フィーンには協力者や創造物などの説明は聞いたが天使については聞いていない。

「ああ、たぶんそれ、フィーンがただ単に天使の事なんて思い出したくなかったからだよ」

優があきれた様子で呟いた。
神様といえど、思い出したくない人物もいるのか。と少し感心した。

「基本的には天使って女ばっかりでさ、俺みたいなのは異質なんだ。だから今は天使としての役割とかどうでもいい感じで普通の人間として生活してるわけ。で、フィーンの世界じゃ・・・・・・天使が男好きばっかりになってさ・・・・・・」

そこで優は言うのをやめたが、何となく察しがついた。

「じゃあさ、私みたいな人はなんていうの？」

そうだ、自分は別に協力者になったわけでもないし、天使といわれる人たちのように最初から神力とかいうい力があったわけでもない。ましてや、神様に作られた存在である創造物でもない。
では、いったい自分は何だ？

「変異者って言ってる。突然変異で力を持った人をそう言ってる。異邦者ってのもいて、異世界から来て元の世界に戻れなくなった人たちをそう言ってる」

だんだん話が見えてきたような気もする。

「で、そろそろ本題に戻ってもいいか？」

ずっと無言で話を聞いていた桔娥が不機嫌そうに言う。きっと一人だけ話からはずされていたのが嫌だったのだろう。

「本題？」

途中から話に入ってきた優は本題について何も分かってないくせにべらべらと喋っていたみたいだ。

「これからの事ですよ。一応俺は平行世界に梓を連れて来いって言われてるんですけど・・・・・一緒に来たやつらとはぐれてしまって」

思いだしたようでまたしょんぼりとし始めた。

「そんなに落ち込むなよ・・・とりあえず、今日はもう寝ようぜ」

優が優しく桔娥の頭をなでた。なんだか都真を思い出す瞬間だった。

「桔娥は・・・・・そうだな、俺のいとことでも適当に言ってれば大丈夫だろ」

結構そう言うところはアバウトなのか。

そこでまたふと思い出した。

「お父さんたちは！」

梓が急に叫んだのでなごんだ空気をかもし出し始めていた二人はびくっと飛び上がった。

「あ、ああ・・・・・梓の両親ね。言い忘れてたな。今は死んだ事になってるけど、実際はこの世界の神様んとこで生活してもらってる。なんせ、お前が事故にあって平行世界に行ったせいで死んだ感じだからお前が同じ時間に戻った時に魂がこの時間ですでに違う

器に入れられると困るから神様んとこでとどめてるんだ」

いまいち話がわからない。

「と、とりあえず・・・・・私が１０年前に戻ったらお父さんたちは生き続けるってこと？」

「まあ、そう言うことだな。後の事は明日だ明日」

あくびをしながらそう言うと優はさっさと梧娥を連れて部屋を出ていってしまった。

全ては明日から決める。

そんな事言われても今、色々したい。今、全てを決めたい。早く元の時間に戻りたい。

そう思っていても、どうやらよほど疲れていたようですぐに寝てしまった。

疲れてるんです（後書き）

え～

自分で呼んでもいまいちわからない（汗

わかるように書けるようになりたいよ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8037q/

三咲物語

2011年10月8日18時09分発行